

東洋學藝雜誌第十七號

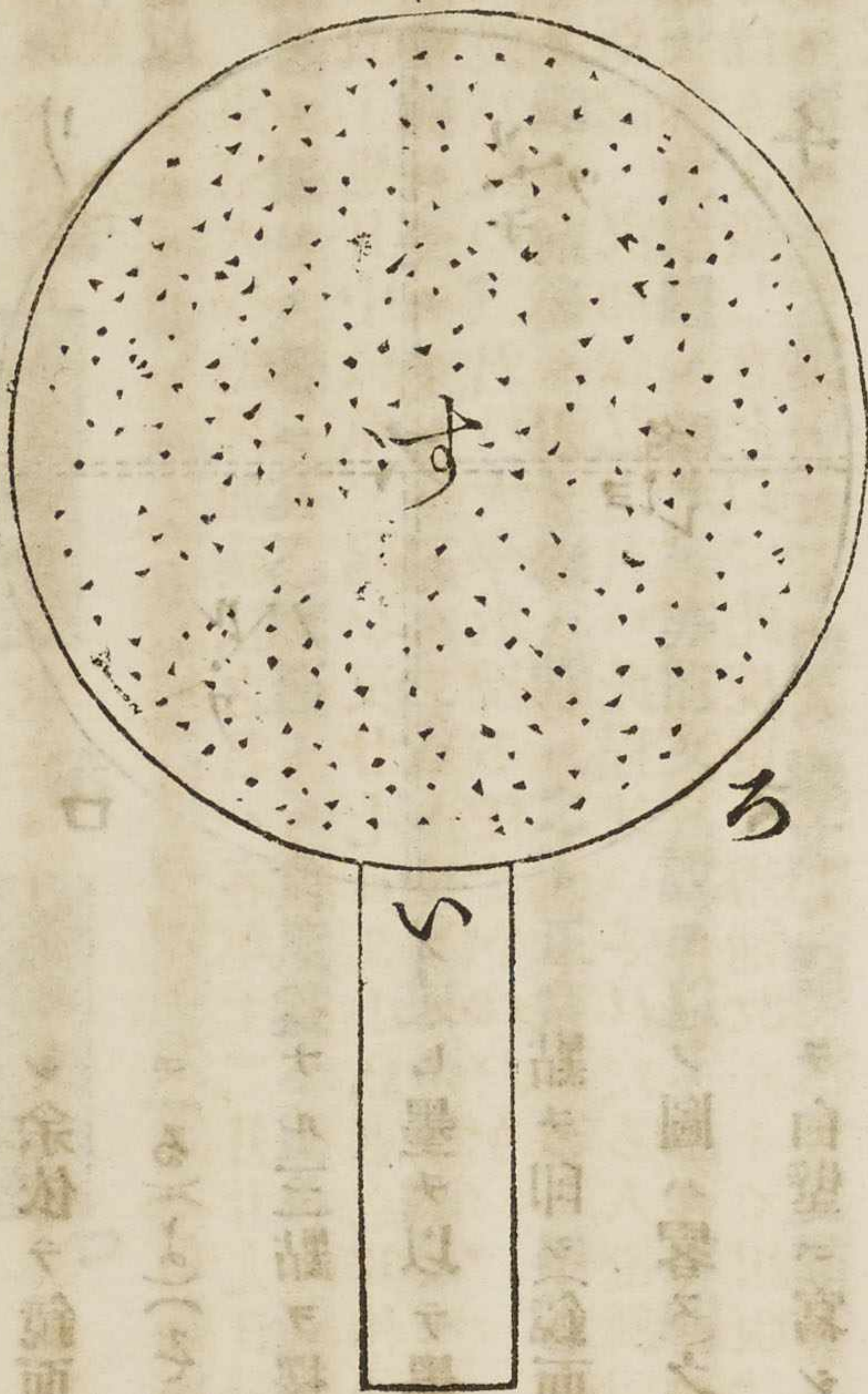
明治十六年二月廿五日發兌

○音色寫畫ノ畧解

村岡範爲馳

日本鏡ヨリ返射スル光線ヲ白壁ニテ遮キリ砂ヲ用ヒスシ  
 テツラドニ一氏ノ試驗ヲ施スルハ寫畫中管ニ節線ノ顯出  
 スルヲツラドニ一氏ノ音色砂畫ノ如キノミナラス別ニ無數  
 ノ派動線アルヲハ本雜誌前第十四號ヲ以テ陳述セリ爾後  
 其原因ヲ探求センカ爲メ數種ノ試驗ヲ施セシヨ右ノ說中  
 少シク謬見アルヲ發顯セリ  
 即チ前試驗ヲ少シク變シ第一圖甲ノ如ク鏡上ニ砂ヲ散布

第一圖 甲

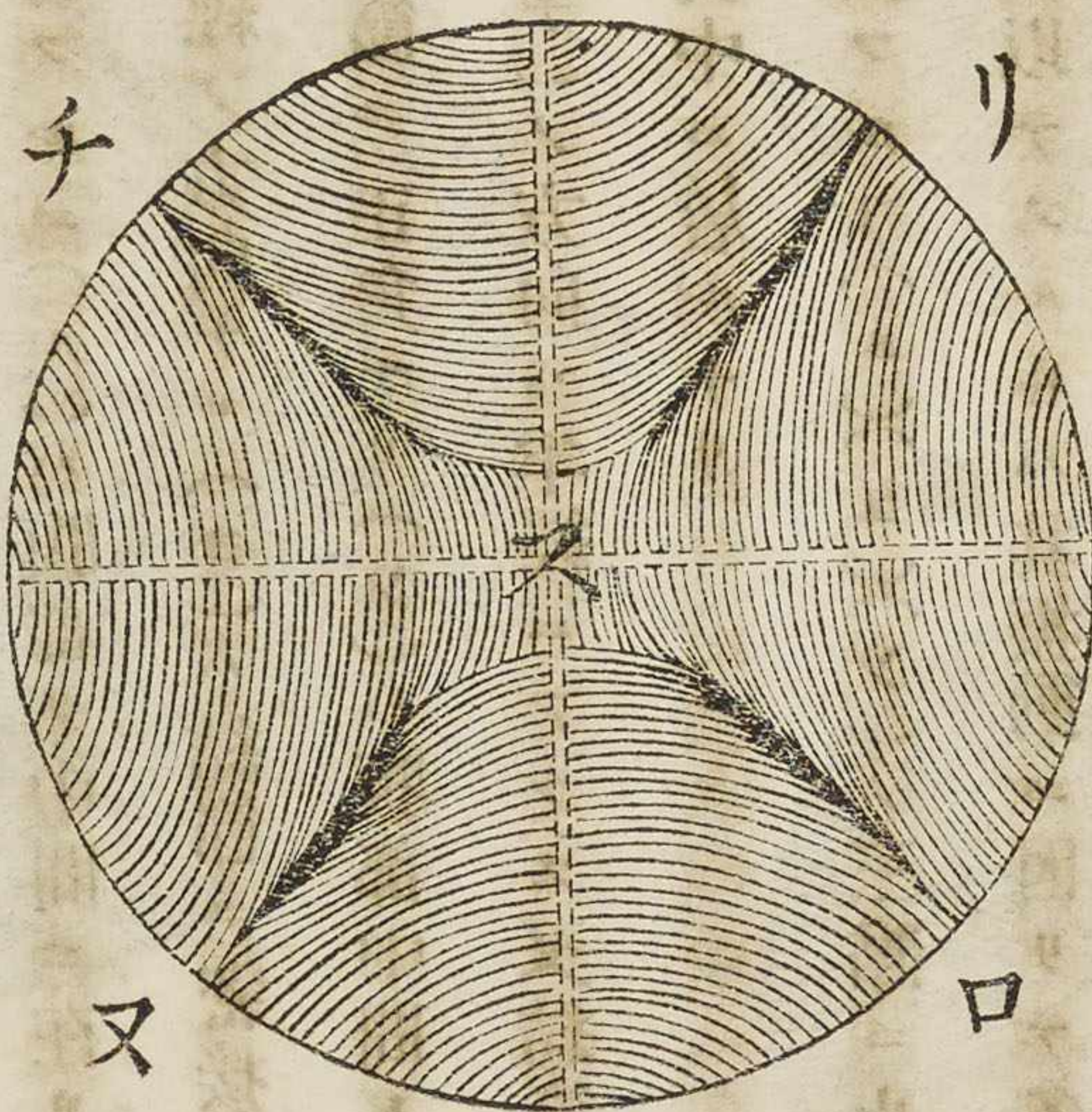


シ中點(す)ヲ螺定シ之ヲ日光ニ當テ其影ヲ白壁ニ寫シ指  
 ヲ以テ(い)ヲ支ヘ胡弓ヲ以テ(ろ)ヲ摩スルルハ第一圖乙

ノ如キ者ヲ得圖中(イホ)ト(ハト)ノ線ハツラドニ一氏  
 砂畫ノ影ニシテ(ロチ)(リヌ)及ヒ其間無數ノ曲線ハ余カ

第一圖 乙

第二圖 乙



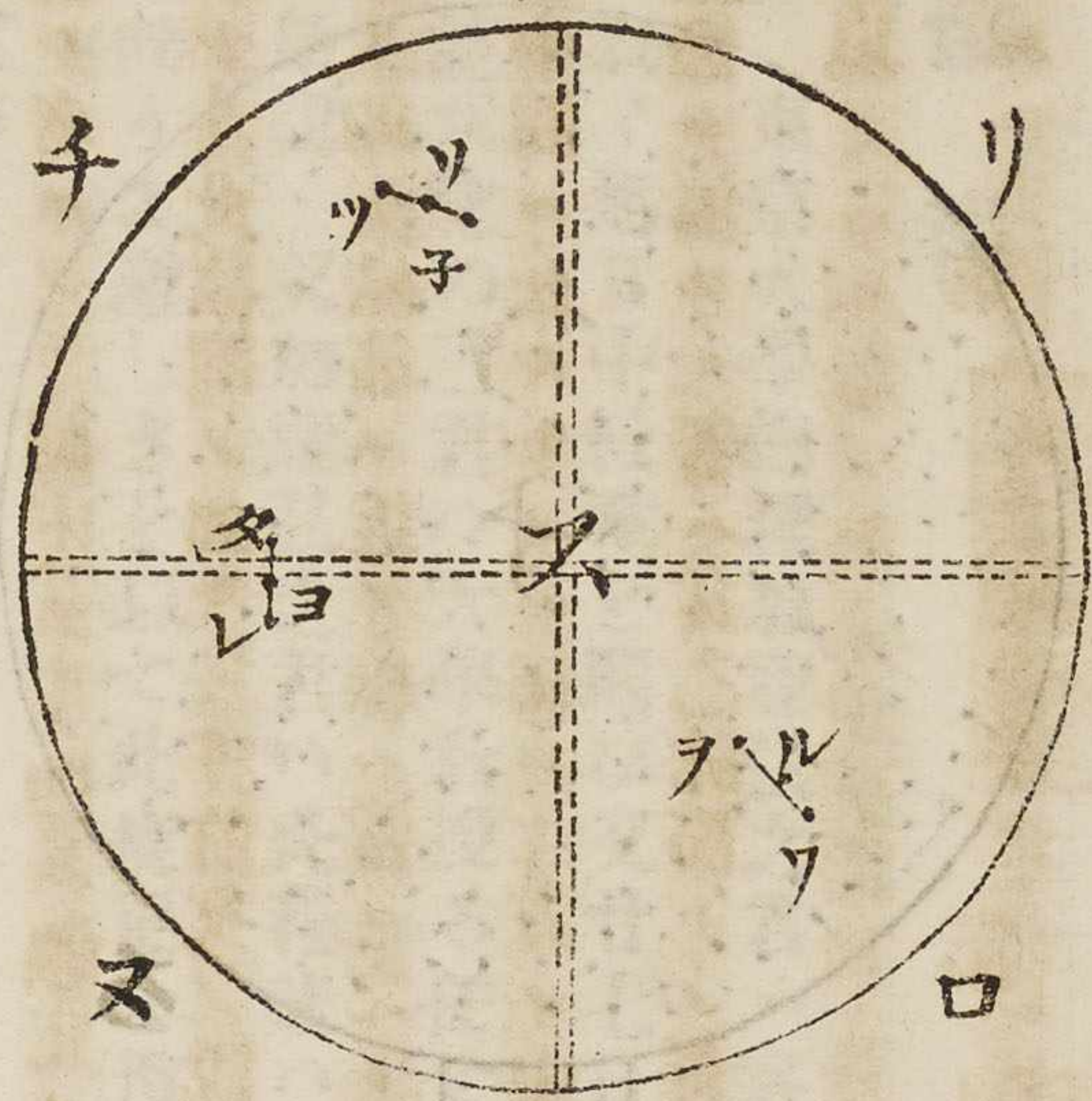
所謂寫畫ナリ而シテ最初ノ試驗ニ於テハ(ロチ)(リヌ)ノ  
 十文字ハ即チ(イホ)(ハト)ナル振動結節ノ影ナリトノミ  
 盲信シ別ニ意ヲ其位置ニ注カサリシカ故ニ本雜誌第十四  
 號百八葉ニ於テ第二圖ヲ以テ寫畫ト認メダリ然ルニ今右  
 ノ試驗ヲ以テ之ヲ考フレハ寫畫十文字ノ位置ハ砂畫十文  
 字ニ比スレハ四十五度ノ差アルナリ又十文字間無數ノ曲  
 線モ振動腹部ノ小派動ヨリ來ルト書セシモ誤ナリ



寫畫ノ原因ヲ探求セント欲セハ鏡面諸點ノ振動ヲ審ニス

第

二  
ホ



ルニ若クハナ  
シ余依テ鏡面  
ニ(る)(よ)(そ)  
ナル三點ヲ擇  
イヒ墨ヲ以テ墨  
點ヲ印シ(鏡面  
ノ圖ハ零ス)之  
ヲ白壁ニ寫シ  
テ第二圖ノ如

キ(ル)(ヨ)(ソ)ナル影ヲ得圖中(イロハリホチトヌ)等ノ位  
置ハ第一圖乙ノ位置ト同様ナル者ナリ今(い)チ支へ(る)  
チ摩スルキハ(ル)ナル點ハ分レテ(チ)(ワ)ノ二點ト爲リ  
(ヨ)ハ(タ)(レ)トナリ(ツ)ハ(ツ)子トナリ(圖中寫畫ヲ省  
ク)其距離始メハ大ナルモ樂音ノ聲稍微ニシテ鏡面ノ振  
動漸ク衰フルヲ告クルニ從ヒ(ヲ)(ワ)二點ノ距離漸々小  
チ加ハへ終ニ合シテ(ル)ノ點ニ歸ス(タ)(レ)ノ(ヨ)ニ於ケル  
(ツ)子ノ(ソ)ニ於ケルモ亦然リ

(ル)ナル影ノ分レテ(チ)(ワ)ノ二點ト爲ナル所以ハ鏡面  
振動ノ爲ニ光線反射ノ角度ヲ變スルカ爲ナリ鏡面一方ニ  
傾フケハ(ル)ノ影(チ)ニ轉シ他方ニ傾ケハ(ワ)ニ移ル振  
動ノ數ハ每秒百ヲ以テ數フルカ故ニ影ノ(チ)(ワ)ノ間ニ  
往復スルヲ甚ク迅速ニシテ人ヲシテ(ヲ)ト(ワ)ノ二點ア  
ルカ如キ感ヲ起サシムレト其實ハ(ナルワ)ノ線ヲ畫クモ  
ノナリ(ヨ)及ヒ(ソ)ノ點ニ於テモ其理一ナリ  
今(ナルワ)(タヨレ)(ツツ子)ナル線ノ方向ト振動腹部結  
節ノ位置トヲ考フルコ(ル)ハ腹部ノ中間ニ在リテ(ナル  
ワ)ノ方向ハ半徑ノ方向ナリ(ヨ)ハ結節ニ密接シテ(タヨ  
レ)ノ方向ハ結節ニ正角ナリ(ソ)ハ腹部中間ト結節ノ間  
ニアリテ(ツツ子)ノ方向ハ半徑ニアラス又結節ニ正角ナ  
ラス傾斜シテ其中ニ居ルナリ  
鏡面ニ黑點ヲ與フルコ(ル)(ヨ)(ソ)ノ三點ニ止マラスシ  
テ多數ノ黑點ヲ以テスルキハ其振動ニ因リテ各點畫ク所  
ノ線ハ其位置ニ從ヒテ方向ヲ異ニス即チ結節ニ密接スル  
點ハ盡ク之ト正角ヲ作り少シク結節ニ遠カルノ點ハ少シ  
ク傾斜シ之ヲ距ルヲ益々大ナレハ傾度愈々加ハ、リ終ニ



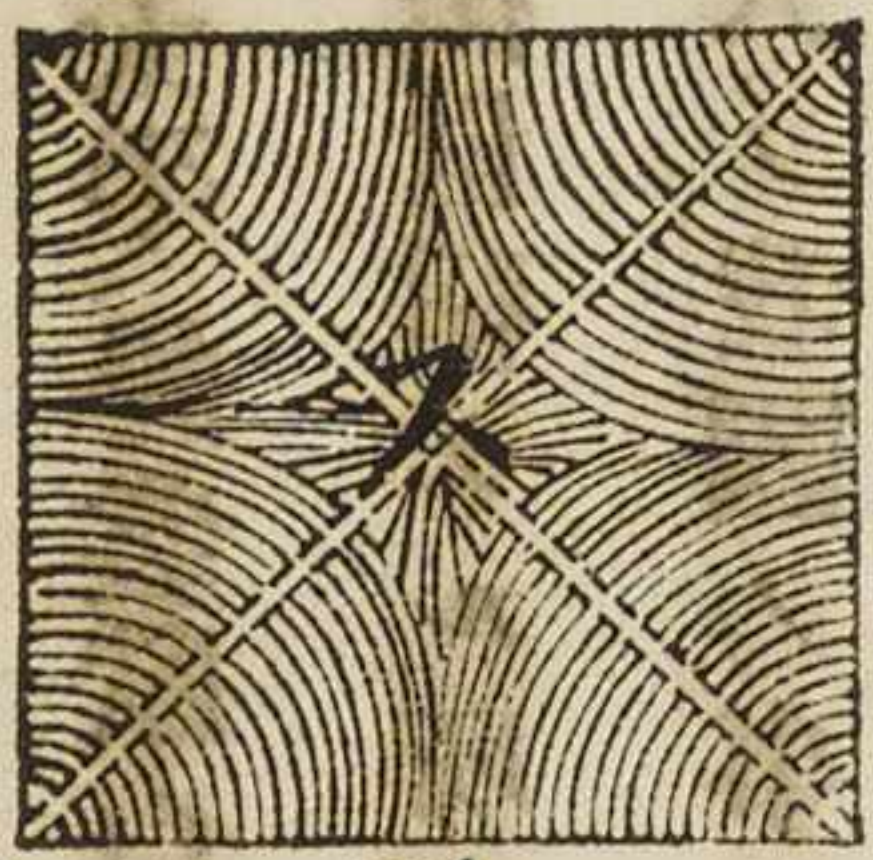
振動腹部中間ノ點ハ半徑ノ方ニ從ヒテ線ヲ畫クニ至ル然  
 ラハ若シ鏡面ニ無數ノ點アルキハ其振動ノ寫畫ハ必ス第  
 一圖乙ノ如クナルコト明ナリ

日本鏡ノ表面ハ平滑ナルカ如シト雖細密ニ之ヲ驗スルキ  
 ハ無數ノ癍痕アルヲ見ル其癍痕ハ高低ノ爲ナルカ或ハ他  
 ノ原因アルカ未タ明言スルコト能ハサレヒ鏡面ヨリ返射セ  
 ル壁上ノ面ヲ驗スレハ又其癍痕ノ影アルヲ見ルヘシ然テ  
 ハ寫畫ノ諸線ハ鏡面ノ癍痕ニ原因スルコト疑ナシ

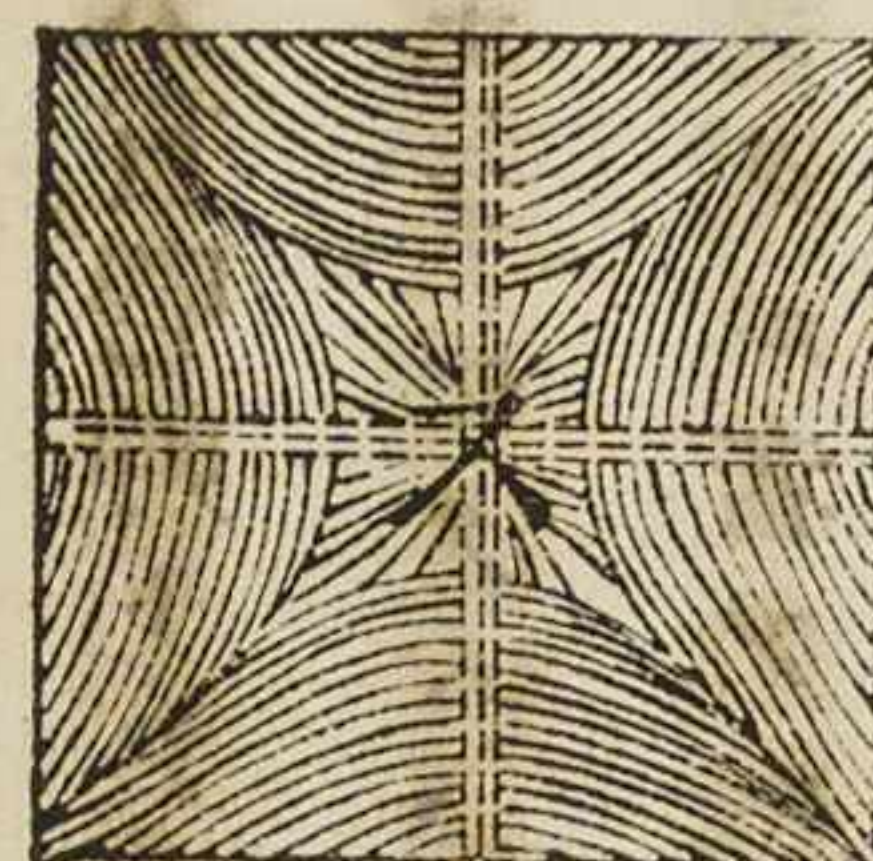
第三ヨリ第七ニ至ルノ諸圖ハ砂畫及ヒ寫畫ノ試驗ヲ同時  
 ニ施セル者ニシテ圖中(ス)ノ印ハ螺定ノ點(イ)ハ支點(ロ)  
 ハ摩點ナリ此諸圖ノ如キモ亦前文ノ說ヲ以テ之ヲ解明ス  
 ヘキナリ即チ結節ニ近キ線ハ常ニ之ト正角ヲ作り甲乙兩  
 結節ノ中間ニ在ルモノハ正ニ二方ノ中ヲ取り甲結節ヲ去  
 リ乙結節ニ偏スル者ハ其乙結節トノ角度益々正角ニ近ツ  
 ク等皆以

テ徵スル  
 ニ足ルナ

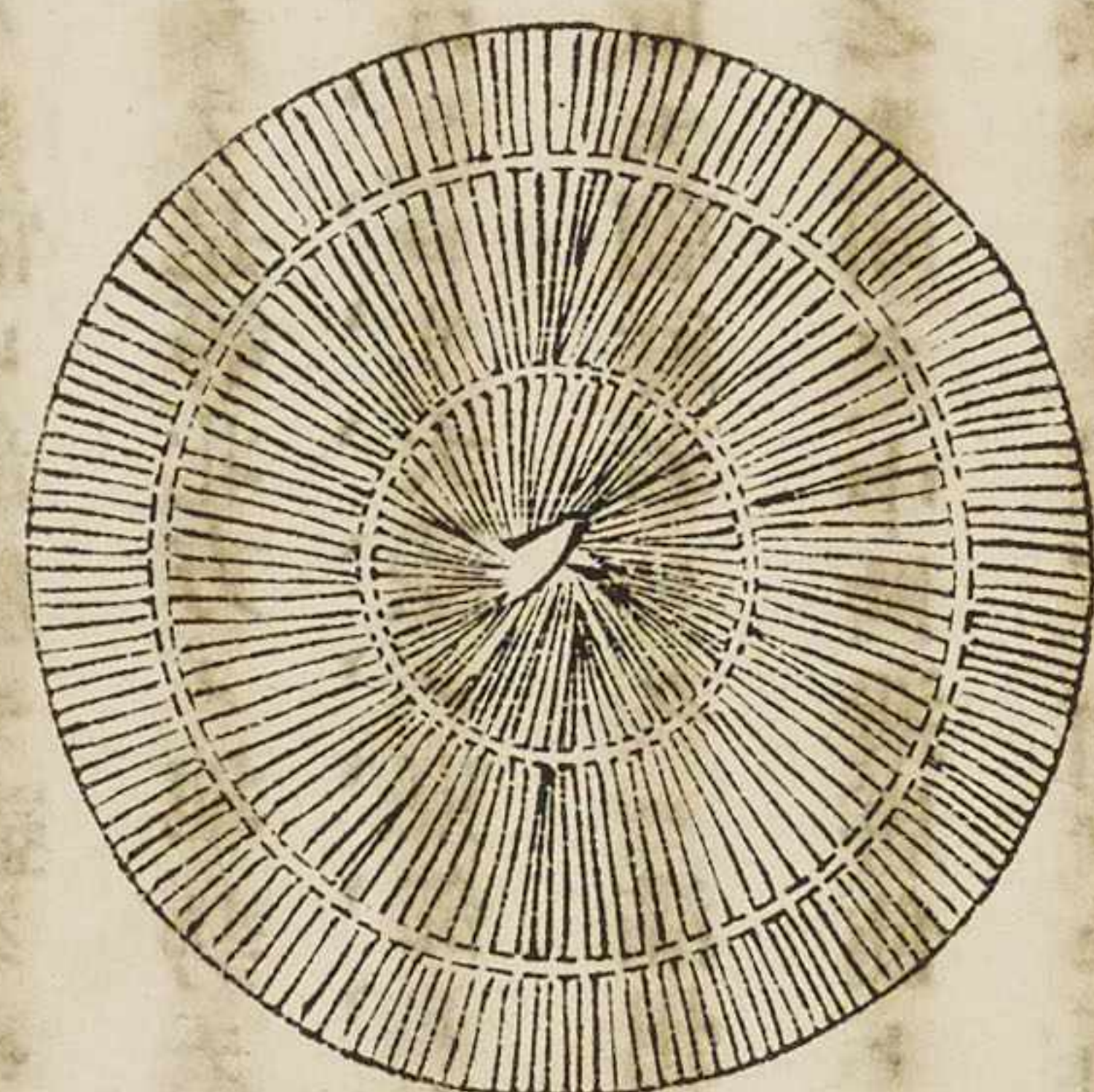
第三圖



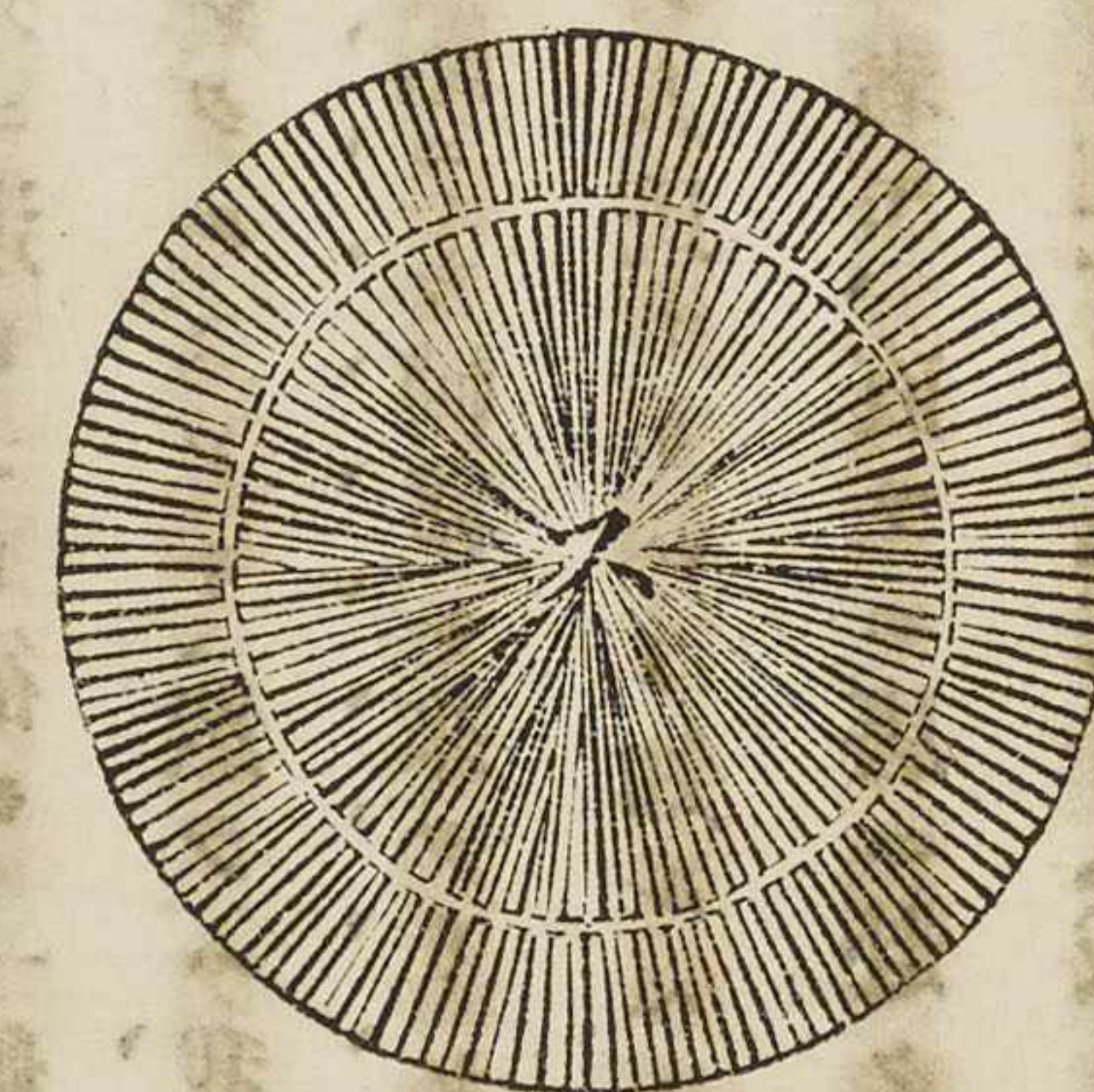
第四圖



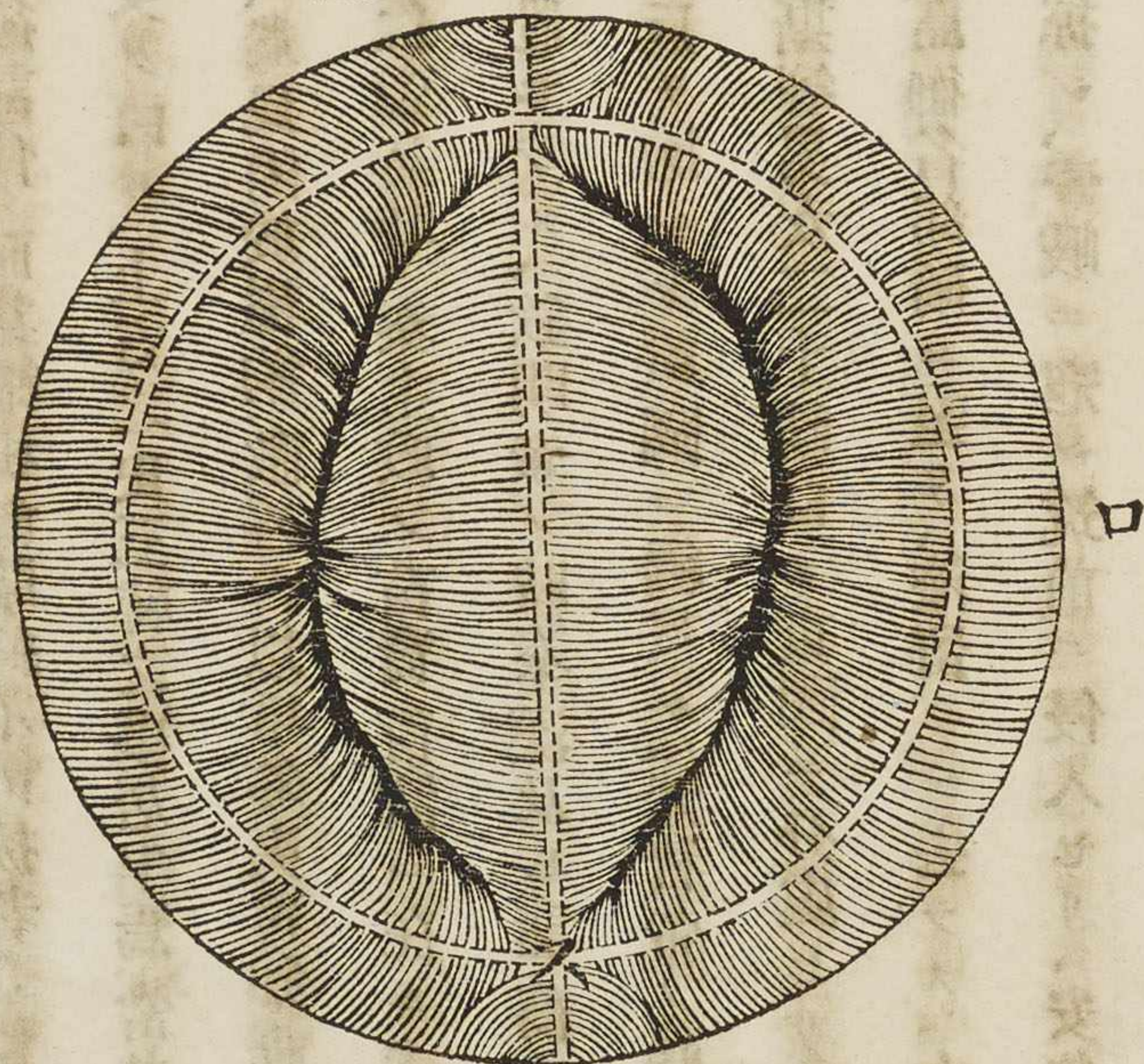
第五圖



第六圖



第七圖



○日本人民固有ノ性質(前號ノ續) 石浦居士  
 第七節 日本ト大陸トノ交通ヲ察スルニ、早クヨリ其道  
 開ケタル者ト見ユ、山海經ニ南倭北倭屬燕トアリ、王充ノ



論衡ニ、周時天下太平、越裳獻白雉、倭人貢鬯艸トアリ、若シ此倭ヲシテ誠ニ後世稱スル所ノ如クナラシメハ、三千年以前ニ既ニ支那人ノ我國ノ事ヲ見聞シタル者アルコト必セリ、舊事記ニ、天祖詔伊奘諾伊奘冊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩之、則賜天瓊戈而詔寄賜也ト云ヒ、高皇產靈勅曰、若有葦原中國之敵、拒神人而待戰者、能為方便誘欺防拒、而令治平令三十二人並為防衛天降供奉矣ト云ヒ、素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅曾尸茂梨之處矣、乃與言曰、此地吾不欲居、遂以埴土作船、乘之東渡、到于出雲國ト云フカ如キハ、文面ノミニテモ、神代ニ外國ヨリ日本ニ侵入セシ者アルコト知ラシム、然レヒ舊事記ハ和學者ノ誤謬多シトシテ取ルチ好マサル所ナリ、余ハ古事記ニモ同様ニ疑惑ヲ懷ケハ、神代ノ事ハサラニ此處ニ記載スルチ止メ、遙カニ人代ニ下リテ外國ト如何ナル交通ノ存シタルカヲ述フベシ、崇神帝ノ時任那入貢ス、垂仁帝ノ時新羅王ノ子天日槍歸化シテ、邑ヲ但馬ニ賜ハル、近江國鏡谷陶人ハ則チ其從人ナリ、神功皇后新羅ヲ征シ、高麗百濟ヲ降附セシム、之ヨリ以前ニ彼レ我レヲ凌駕セントセシニ

以後ハ我レ彼レヲ攻伐シテ爭亂絶ユルナシ、武内宿禰其弟ノ爲メニ二韓ヲ招キ、筑紫ニ據テ謀反スト、讒セラレタモ、偶然ニ非ラス、賴襄曰ク、夫熊襲久雄長西偏以景行與日本武前後討伐、而其蟠根餘孽終不可拔者、蓋倚新羅爲後援也ト、又タ曰ク、上古之史三韓之事居半焉、當其時蓋將卒疲於奔命、農民困於糧餉、敵國內以事外夷可知也云々ト、然リ而シテ應仁帝ノ時、秦主政ノ苗裔百濟ニ在ル者歸化シテ諸郡ニ分置セラル、欽明帝ノ時秦漢及ヒ諸藩ノ投化スル者七千餘戸ヲ檢シテ諸國ニ編貫シ、天智帝ノ時百濟投化民鬼室集斯等男女二千餘口ヲ東國ニ分處セリ、又タ肅慎ノ船佐渡島御名部碕ニ至リ、淹留シテ去ラス、女真來リテ對馬ヲ焚掠シ、壹岐ニ寇シ筑前ニ侵入セリ、安倍賴時破滅チ取ルヲ懼レ部屬ヲ盡クシテ海外ニ遁レント欲シ、一船ニ乘シテ是等北方ノ地勢ヲ觀察シタルコトアリ、然ラハ我國ハ古ヘヨリ大陸ノ東部ト交通ヲ開ラキ轉移シ來タリシ者モ最モ朝鮮若シクハ滿州地方ノ人民ナリシコト知ルヘシ、余之ヲ聞ク、中世遣唐使ト稱セシ者モ、直チニ唐ニ赴クニアラスシテ、先ツ朝鮮釜山浦ニ着シ此ヨリ陸行シ、或ハ沿



岸ニソフテ彼地ニ達セリト、勢寔ニ然ルヘキナリ、尤モ其  
他ノ國土ト絶ヘテ交通ナカリシトハ云フヘカラス、唯タ  
古記ニ漏ラシテ徵スルヲ得サルナリ、

第八節 余ヤ此ニ於テカ略ホ地理ヲ按シ、相貌骨格ヲ檢  
シ、言語文法ヲ探リ、風俗ヲ察シ、古代ノ歴史ニ徵スルヲ得  
タリ、事理淺薄ニシテ、考證ニ誤謬少ナカラサルヘシト雖  
モ、十中四ヲ捨テ六ヲ取ルヲ得ハ、以テ日本人民ノ宇内何  
地方ヨリ來住シタルカナ知ルニ足ルヘシ、吾人ノ祖先ハ  
某氏ノ考フルカ如ク、蝦夷人ノ同類ニシテ神孫人種ト稱  
スル者ノ爲メ、征服壓迫サレテ漸ク開明ニ赴キタル者ニ  
アラス、又タ某氏ノ考フルカ如ク、巫來由人ノ南方ヨリ起  
リテ沿海處々ヲ標掠シタル後チ此地ニ住居ヲ定メ、世  
態ヲ改良シタル者ニアラス多クハ朝鮮滿州以西ノ國土即  
チ韃靼地方ヨリ遷徙シタル民ナルヲ別ニ辨セスシテ明カ  
ナルヘシ、他ノ種屬ノ混合スルアレモ甚ダ僅小ニシテ之ヲ  
索求スルハ、年代記ヲ編制スルキニ要用ナリトスルモ、國  
民一般ノ性質ヲ論シ、古來開化ノ方向ヲ指示セントスル  
ニハ、措テ顧ミスシテ不可ナルナシトス、然ルニ人民固有

ノ性質ト稱スヘキ者ハ、總テ韃靼地方ノ事物ヨリ刺衝ヲ  
受ケテ成立シタルカ否ヤハ、現時ノ學問ヲ以テ確ト判斷  
スル能ハス、人類初生ノ地ニ就テハ、議論紛々トシテ決セ  
ス、地質學者人種學者並ニ歴史家ハ多クハ亞細亞中央ノ  
高土ニシテ、稍ヤ西南ニ當ル部分ニ存在スト定メタレモ、  
モシエルハ地層ノ變動ノ爲メ印度洋ノ底ニ沈没シテモ  
ハヤ其跡ヲ見ルヘカラスト唱ヒ、カイトルフアジニハ今  
ノ西比利亞ハ古ヘ動植物ノ最モ繁殖シタル地ニテ人類モ  
必ス此ニ發生シタルヘシト云ヘリ、說ノ一定セサルヨリ  
或ハ此事ハ人間ノ決シテ知ルヘカラサル者ナリト斷言ス  
ルアリ、余今マ一說ニ從テ論ヲ立ツルモ、他ヨリ見レハ固  
ヨリ牽強附會ニ涉ルトセラルヘケレハ、先ツ思ヒ止マリ、  
更ラニ轉シテ我祖先ノ久シク蒙古滿州ノ間タニ往來シ居  
タルヲ證セン、支那人民ノ黃河近傍ニ在リテ、大ニ進歩  
チ政治學藝上ニ顯ハシタルハ、少クトモ今チ去ル四千年  
以前ナリ、他ノ人種ノ安額河濱ヤ由非刺底地革里斯兩河  
ノ中間及ヒ亞刺比亞地方ニ於テ頗ル盛大ナル邦國ヲ開ラ  
キシモ、亦タ四千年ニ下ラス、而シテ是等ノ人民ハ言語風習



歴史ニテハ韃靼種屬ト全ク逕庭シテ絶ヘテ類似スル所ナ  
 キカ故ニ蒙古人等カ若シ初代ニ亞細亞大陸ノ南部ニ在リ  
 テ生活ノ業ヲ營ミタルコアルナレハ、四千年以前ニ既ニ  
 中央ノ高土ニ轉移シ終リタリトセサルヘカラス、夏ノ獮  
 鬻商ノ獮狃ハ眞ニ蒙古ニ住スル人種ヲ指セシナリ、増シ  
 テ支那印度等ノ人民カ若干ノ土地ヲ專有シ軍兵ヲ練リテ  
 他種屬ノ亂入ヲ防キ、智識ヲ磨シテ、制度文物ノ隆盛ヲ致  
 スニ至ル迄テニ許多ノ星霜ヲ經タルニ相違ナケレハ蒙古  
 人滿州人ノ住居ヲ中土ニ定タメ、衣食ノ爲ニ往來シタル  
 ハ、唯ニ五千年ヤ六千年ノ前ニアラス、史乘ニ於テハ、誠ニ  
 久遠ノ世ニアリトセサルヲ得ス、假令ヒ然ラストスルモ、  
 韃靼ハ地瘠薄ニメ人ノ圍繞物ニ對抗シ難タキ處ナレハ、  
 一千年間此ニ栖息シテ刺衝ヲ受ケレハ、身ニ大變更ヲ生  
 シ、殆ト別種ノ人ノ如クナルヘキナリ、故ニ我祖先ノ性質  
 ニ刺衝ヲ與ヘタルハ、如何ナル事物ナリシカヲ知ラント  
 欲セハ、亞細亞中土ノ形勢氣候地味等ヲ觀察シテ稍ヤ滿  
 足スルヲ得ヘシ、余ハ始メニ人類初生ノ地ヲ發見スルコ  
 ト務ムルヨリハ、寧口直チニ匈奴ノ巢窟ト呼ハレタル所

ノ情勢ヲ探討スルヲ切要ナリト信スルナリ、  
 第九節 世ニ流布スル輿地誌略ニ依テ亞細亞一般ノ地勢  
 ヲ察スルニ、左ノ如シ、此大州ノ表面地方ニ從ヒ高低甚同  
 シカラス、大略地中海ヨリ大平洋ニ接シ、東西ニ亘リタル  
 中央ノ地勢甚ダ高峻ニシテ、次第ニ南北ニ下ル故ニ之ヲ  
 以テ三部ニ大別スヘシ、其一中央ハ最高地ニシテ高山峻  
 嶺蔓延シ、平地ト雖ヒ數千丈ニ至ル者アリ、其二ハ高地ノ  
 北部ニシテ次第ニ低下シ、廣大ノ平原ヲ爲シテ、北氷海ニ  
 接シ氣候概テ沍寒ナリ、其三ハ中央高地ノ南部ニシテ、其  
 端ハ印度海ニ突出シ、北ニ高山ヲ負ヒ、氣候甚ダ炎熱ナル  
 所多シト、以下他ノ地理書ノ文意ヲ取ル少ナカラス、  
 按スルニ其中央ノ東半ハ實ニ滿州蒙古等ナリトス、北ニ  
 阿爾泰山衆皴駢列シ、南ニ崑崙ノ山脈雲表ニ翠嶺シ、西ニ  
 リ天山ノ群峯連綿シテ内地ニ亘タル、其間タ面積五十萬  
 三千方里アリテ、曠漠無邊ノ原野ヲ作クリ、往來スルニ一  
 望平々トシテ目ヲ遮ル所ハ、唯タ沼澤ノ散在スルト岡坡  
 ノ漸々ニ起コリ漸々ニ伏スルアルノミ、瘠腹薄膏相ヒ交  
 ハリ、爾爾タル枯草、茫々タル野艸遙カニ天ニ連ナリテ盡



キス、特ニ内ニ跨ル所ノ戈壁、或ハ瀚海ト名クル大沙漠ハ、東西五百里南北二百餘里ニ亘タリ、草木無ク鳥獸出テス、沙漠トシテ遠ク大洋ヲ望ムカ如シ、烈風興レハ驚沙面ヲ打チ、砂礫雲際ニ捲キ上リ捲キ下リテ、頃刻ニ丘山ヲ成スニ至ル、總シテ空氣乾燥ニシテ、朝露ヲ見ル少クナシ、北ハ氷海マテ平坦ニシテ低下スルノミナラス、地ノ海面ヲ抜ク一甚ク高ケレハ、冬ハ至テ寒冷ニシテ、凜々肌膚ヲ侵カシ、李華ノ至若窮陰凝閉、凜冽海隅、積雪沒脛、堅冰在鬚、鷲鳥休巢、征馬踟躕、縉纒無温、墮指裂膚、ト言ヘルノ妄ナラサルヲ思ハシム、而シテ夏ハ之ニ反シ、日光赫々トシテ、直接ニ廣大ナル沙地ニ反射スルヨリ、夜ハ冷ナルモ、晝ハ概テ炎熱酷烈ヲ極ム、氣象ニ顯ハル所ハ、盛夏ノ日、雲氣急ニ空湧シテ、大雨傾キ注キ、暴雷地ヲ打チ降ルヲ最トス、出ス所ノ土産ニハ、參鹽玉松石高粱藥材アリ、處ニ依リ麥粟豆芝麻大黃大豆茴香花椒モアリ、松杉徃々ニ森林ヲ爲シ、内ニ猪熊虎豹麋鹿狐狸紫貂獺兔麝松鼠ヲシテ奔走セシム野ニ羊驢駱駝牛馬アリ土地ノ豐饒ナル所ニハ、草艸暢茂シ、深キ一八頭ヲ填ミ馬脊ヲ沒ス、土人長ニ過クルヲ認メ火ヲ放

ナチテ數十里ノ間ヲ煙焰ニ化スルニ一週ヲ出テスシテ、新草勃然トシテ鬱興スルヲ見ル、賴テ以テ無數ノ畜類ヲ養フコ足ルナリ、然ルコ一旦旱蝗ノ勢ヲ逞フスルニ當テハ、諸在ノ草木盡ク枯レ、人民畜獸共ニ飢疫シ、蒼々タル曠野變シテ赤色ノ燒土ノ如クナルト云フ、此ノ如キ土地ニ住居ヲ定タメ、衣食ヲ求ムレハ果シテ如何ナル痕跡ヲ性質ニ留ムヘキカ、諸人必ラス摸倣ヲ重シ輕噪ヲ喜コヒ人ニ依賴スルヲ好ムヘキナリ、

第十節 智力ノ發達ハ、廣ク事物ノ關係ヲ察シ細微ニ因果ヲ辨シ、同不同ヲ識別スルニ因ル者ニシテ、事物ノ周邊ヲ圍繞スル錯謬龍雜ヲ極メ、刺衝ノ爲メニ常ニ心意ヲ多樣ニ興奮セシムルヲ利アリトスルナリ、山川野海參差相ヒ接シ、氣候乾燥アリ、淫濕アリ、温熱寒冷時ニ好ク中和シ、草木蟲魚種類多ク、禽獸群ヲ爲ス所ト絶ヘテ存在シ得サル所トアルハ、貿易ヲ進メ、分業合業ヲ隆盛ニシ、普ク宇内ノ事物ニ感觸セシムルヲ以テ、知識ヲ開發スルニ甚ク緊要ナリトス、然ルニ蒙古地方ハ諸事全ク之ニ背反ス、歩シテ回顧シ、坐シテ俯仰スルモ、眼ニ障ルモノハ野艸ノ莽々



タルト、山嶺ノ嵯峨タルト、砂礫ノ平布スルトアルノミ、氣  
 候常ニ乾燥ニシテ、冬ノ極寒直チニ夏ノ酷熱ニ從ヒ、毫モ  
 衆芳英ヲ發ラク等ノ精神ヲ聳動スルナシ、荒草繁茂シ、獸  
 畜群聚ヲ爲シテ蕃殖スルヲ得ルカ故ニ渾肉飽クマテ飲食  
 スルニ足リ、皮革旃裘重サテ被ルニ餘アリテ、心意偏ヘ  
 ニ獵ト游牧トニ傾キ、別ニ致々トシテ製製ヲ競ヒ、貿易ニ  
 勉強スルヲ欲セス、亦々固ヨリ心ヲ苦ルシメ、思惟究察シ  
 テ、學藝ヲ増進スルヲ要セサレハ、本來發明ノ力ニ富ミ  
 タリトスルモ、漸次ニ減スヘシ而シテ何地ニ限ラス、水草ノ  
 供給ヲ得ル所ニ轉移シ常ニ已レヨリ開化シタル種屬ノ物  
 品ヲ抄掠センコトヲ務メ苦樂ノ事皆ニ直接ノ勢ニ任スルヲ  
 以テ事ヲ成スニ摸倣蹈襲ヲ重ンスヘキナリ  
 情感ハ身ニ觸ル、所ノ事物激動セス、能ク倫次秩序ヲ得  
 テ進行スルキハ自然ニ沈着スル者ナリ、山海ノ路通達シ  
 四季節ニ依テ循環シ、柔草地ヲ拂ラヒ、松柏立テ、梅花開ラ  
 キ、猛獸已ニ逃匿シテ、家畜養馴サル、ハ人ヲシテ沈重着  
 實ニ赴カシムルノ効アリ、而シテ蒙古地方ノ形狀ハ、大ニ之  
 ニ違フ曠野漠々トシテ、往クニ方角ヲ定ムルヲ得ス、氣候

不順ニシテ、倏忽ノ間タニ變換シ、炎熱ノ準備ヲ成セハ、早  
 シ霜雪ノ降ラントスルアリ、獸畜多クツ、專ラ獵牧ヲ職ト  
 スルヨリ馳驅奔走ニ長シ、家宅ヲ定タメテ事ヲ取ルヲ厭  
 ヒ、且ツ野草ノ減スルニ從テ他處ニ轉徙セサルヘカラサ  
 ルノミナラス、旱蝗ノ爲メニ忽然全野ヲ消亡シ、衣食ヲ失  
 スルノ恐レアルカ故ニ、豫シメ前後ヲ推慮シ、將來ノ計謀  
 チ爲スコトヲ得ス、此様ナル地ニテハ如何ナル人モ次第ニ  
 着實ノ性ヲ失スヘシ、然ルニ急速ニ時ノ變動ニ順應スル  
 チ以テ先務トシ、加フルニ空氣乾燥ニシテ、体内汚分ヲ蒸  
 發シ血脈ノ運動ヲ速カコシテ、活潑ノ氣力ヲ益ス所ヨリ、  
 業ヲ施コスニ輕躁銳進ヲ喜コフヘキナリ、  
 戰爭ニ勝利ヲ得ルニハ、衆多ノ人固ク協同和合シテ一人  
 ノ命令ニ從ヒ、彼レ是レ均シク速カニ運動セサルヘカラ  
 ス、蒙古人ハ部族ヲ分カチテ水草ヲ求メ、掠奪ヲ務ムルヨ  
 リ不意ニ戰爭ヲ開クノ恐レアレハ、常ニ結合シテ他人ノ助  
 カヲ假ランコトヲ望ム、但シ本ト恒産アリテ後チヲ慮リテ  
 始終協合スルノ意アルニアラサレハ、敗北ヲ取ルカ、或ハ  
 世ノ平和ニテ續クキハ、各々離散シテ自己ノ利益ト成ル



一キ事ヲ謀ル、一合一散、真ニ容易ナリトス、史記匈奴列傳  
 ニ云フ、其俗寬則隨畜、因射獵禽獸爲生業、急則習戰攻、以侵  
 伐、其天性也ト、又云フ、其戰人々自爲趣利、善爲誘兵、以冒  
 敵、故其見敵則逐利、如鳥之集、其困敗則瓦解雲散矣ト、習ヒ  
 性ヲ成シテ平時ノ交際ニモ、自ノツカラ之ニ類似スル者  
 アルヘキナリ、風俗慣習ヲ見レハ、醜トシテ賤シムヘキ者  
 ノ如シト雖也、其然ル由緣ハ、漢使ト中行説トノ問答ヲ以テ  
 充分ニ察知スルニ足ル、同傳ニ云フ、漢使或言曰、匈奴俗賤  
 老、中行説窮漢使曰、而漢俗屯戍從軍、當發者其老親豈有不  
 自脫、溫厚肥美、以齎送飲食、行戍乎、漢使曰、然、中行説曰、匈奴  
 明以戰攻爲事、其老弱不能鬪、故以其肥美飲食壯健者、蓋以  
 自爲守衛如此、父子各得久相保、何以言匈奴輕老也、漢使曰、  
 匈奴父子乃同穹廬而臥、父死妻其後母、兄弟死盡取其妻、妻  
 之無冠帶之飾、闕庭之禮、中行説曰、匈奴之俗、人食畜肉、飲其  
 汁、衣其皮、畜食草飲水、隨時轉移、故其急則人習騎射、寬則  
 人樂無事、其約束輕易行也、君臣簡易、一國之政、猶一身也、父  
 子兄弟死取其妻、妻之惡種姓之失也、故匈奴雖亂、必立宗種、  
 今中國雖詳、不取其父兄之妻親屬、益疏則相殺、至乃易姓、皆

從此類、且禮義之敝、上下交怨望、而室屋之極、生力必屈、夫  
 力耕桑以求衣食、築城郭以自備、故其民急則不習戰功、緩則  
 罷於作業、嗟土室之人、顧無多辭、令喋々而佔々、寇固何當云  
 々ト、隨分詭辨ニ涉ルナキニアラサレトモ、蒙古自然ノ勢ヒ  
 寔ニ然ルヘシ、虚心ニテ其全体ノ主意ヲ考フルニ有名ナ  
 ル史學士ヘーレンノ亞細亞中土ノ人民ニ就テ縷々陳述  
 セル所ト符節ヲ合スルニ似タリ、  
 總括シテ淘汰ノ理ヨリ觀レハ、蒙古地方ニ於テ發明ノ力  
 ヲ減シテ摸倣ヲ重ンシ、着實ノ性ヲ失シテ輕躁ヲ喜コヒ  
 獨立ノ氣ヲ損シテ人ニ依賴スルヲ好ムハ、生存競爭ノ爲  
 メ、甚タ肝要ナリトス、環象不順ヲ極メ常ニ所用物品ニ不  
 足ヲ生シ、今ニ明ヲ豫定スヘカラサル曠野ニテ星辰ノ運  
 行ヲ研究スルハ論ナク、衣服ノ制、家屋建築ノ法ヲ按シ或  
 ハ隣邦ノ形勢ヲ察シ貿易ヲ隆盛ニシテ、東西ノ有無ヲ通  
 セント欲セハ、到底激烈ノ變勢ニ後ッレ、他種屬ニ國ヲ蠶  
 食併吞セラレサレハ、必ラス凍餓ニ苦ンテ死スヘキノミ、  
 此地ニ於テハ、世ノ所謂ル希倖ヲ以テ貴シト爲スハ、則ハチ  
 平時ニハ親屬朋友ノ爲ス所ニ倣ラヒ、事アレハ前後左右



ヲ顧ミス、唯ダ一時ノ血氣ニ任シ、勇力ノアル限り奮ヒ  
忽チ衆人ヲ制馭シ、又タ忽チ人ニ屈服シテ、惟タ命コレ聞  
キ、大群聚ノ勢ヲ付テ俱ニ處々方々ニ奔走スルニ堪ユヘ  
キ者競争ニテ最モ多ク生存スルヲ得ルナリ、

第十一節 余ヤ第十節ニ於テ蒙古人ノ性質ハ刺衝ヲ受ケ  
テ如何ナル痕跡ヲ留メタルカヲ辨シ、第九節ニ於テ之ニ  
刺衝ヲ與ヘタルハ如何ナル事物ナリシカヲ述ヘ、第八節  
ニ於テ彼等ハ久シク且ツ強ク此事物ニ遇觸シテ痕跡ヲ脱  
スル速カナラサルヲ説キ、第七節ニ傳記第六節ニ風俗、  
第五節ニ言語、第四節ニ体格、第三節ニ地勢ヲ論シ以テ日  
本人民ノ蒙古種屬ノ一部分タルヲ判定シ、第二節ニ於  
テ此論法ノ好シ人種移徙ノ狀ヲ探討スルニ適應スルヲチ  
稱シ、而シテ第一節ニ於テ吾人ノ性質ハ多ク海外ノ祖先ヨ  
リ遺傳シタル者ナルヲ云ヘリ、然ラハ前節ニ掲ケタル  
蒙古人ノ性質ハ則チ日本人民固有ノ性質ニシテ今マ尙  
ホ多ク吾人ノ體內ニ附着シ居ル者ニアラサルヲ得ルカ余  
ハ斷シテ得サルヲ信ス

遺傳ノ力ハ實ニ大ナリ、蒙古人ノ魯西亞ニ侵入シテ、匈加

利國ヲ建テ、支那ヲ平定シテ、元政ヲ施コシ、印度ヲ併吞シ  
テ、莫臥爾國ヲ成スヲ見ルニ、皆チ本來ノ性質ヲ保存スル  
ヲ知ルナリ、米歐回覽實記匈加利國ノ部ニ左ノ如ク言ヘ  
リ曰ク、壞ノ博士モレシー氏其近狀ヲ論述スルヲミルニ

我開化ヲ進ムルニ省顧スヘキ多シ、此ニ其略ヲ附記セン、  
匈加利國ハ歐洲中農業國ナリ、人民ハ手技ヲ專ラニシ、器  
械ノ利用ニ少シ、道路欠乏シ、運輸ノ便ヲ開カス、地ニ礦産  
アルモ開採シテ利益ヲ獲ルヲ務メス、貴族跋扈シ、人民其  
下ニ役セラレ、學藝共ニ振ハス、儲直徒ニ騰貴シ、甚ダ開化  
ニ後レタリシニ、一千八百六十八年ヨリ自主建國ノ素願  
ヲ達シ、上下欣悅ノ情ヨリ、頓ニ世ノ開化ヲ跋及シ、一大強  
國トナランヲ望ム情慾ニ誘セラレ、政府首ヲ卒テ、壯大ノ  
業ヲ興サント、租稅過半ヲ消費シ、兵卒ヲ徵シ、官吏ヲ増シ、  
或ハ資金ヲ募リテ、教育ヲ弘布センヲ圖リ、或ハ鐵道建  
築ヲ務メ僅ニ二個年間八百英里ヲ落成シタリ、或ハ餘多  
ノ蒸氣器械ヲ買入ル等、宏大ノ費ヲ糜シタレト、元來開化  
ノ因テ興ル原由ヲ推窮セス、徒ニ外貌ヲ飾ルニ精神財力  
ヲ棄タルヲ少カラス云々ト以テ一斑ヲ見ルニ足ルヘシ



某氏ノ評モ概チ固有性質ノ遺傳ヲ以テ解説スルヲ得ルナリ、但シ遺傳ノ性質ト云フトモ、時ヲ經ルニ從テ自然ニ脱セラル、ハ、火熱ノ金石ニ於ケルニ異ナラス、祖先ノ日本ニ移住シタルハ、今ヨリ二千年前ノコトニシテ、爾來絶ヘス新刺衝ノ來ルニ遇シタレハ、吾人現時ノ性質ハ別ニ群島内ノ事物ヲ檢討シタル上ニアラサレハ、充分ニ知ルヘカラス、吾人ハ成ルヘク早ク固有ノ性質ヲ脱スルヲ利アリトシ、今ヨリ務メテ蒙古ノ狀勢ニ反シタル業ヲ成シ、以テ發明ノ力ヲ益シ、着實ノ性ヲ保テ、獨立ノ氣ヲ養フヲ望ムヘキカ、抑モ勢ニ頼リ外ニ爲ス所アルヘキカハ疑惑ヲ免カレスシテ、切ニ議論ヲ要スルナリ、余ハ是等ノ事ハ、本篇ノ主旨ニ關セサレハ、嘴ヲ容レスト云フ、

此篇ハ余ノ漫録ニ係ルナリ、隨テ檢閲スレハ、節ノ長短宜キヲ失シ、誤謬紙面ニ散在シ、或ハ時ニ論理法ニ合ハスシテ、特別ノ原因ヲ普通ノ原因ト認メタル若キ弊アルヲ見ルヘシ、余其然ルヘキヲ察シ、而シテ人ニ示メサント欲スルハ、蓋シ故アリ、方今我國開化ノ本源ヲ探リ、風俗人情ノ因テ定マレル所ヲ辨セント試ル者、專ラ日本

群島内ノ事物ヲ搜索シテ満足セントスルニ似タリ、コレ怪シムヘシ、ギヅノ開化史ニ好ク世態ノ變遷ヲ述ヘタルモ、世ニ貴重セラレサルハ、原因ヲ論スルノ淺薄ナルヲ以テナリ、バツクルノ開化史ニ詳細ニ原因ヲ説キダレヒ、學者ノ取ル所トナラサルハ、近因ニ注意シテ遠因ヲ檢セサリシニ頼ルナリ、遠因トハ後日ニ如何ニ考ヘラル、ニセヨ、今日ニテハ形質ノ遺傳ヲ指スヘハ、學士中殆ト一定シタル説ト云フヘクシテ、別ニ卓見アリテ之ヲ採用スルヲ好マサレハ、先ツ其非ヲ證セサルヘカラス、而シテ我開化ヲ論スル者ハ原因ト云ヘハ、單ニ近因ニノミ意ヲ用テ島内ノ形勢風土ヲ觀察スルハ、果シテ何故ナルカ、聞ク所ニヨレハ、其ノ或ハ帝室ノ權威ニ關スルヲ畏レ或ハ愛國心ナキ者ト稱セラレシヲ恐レ或ハ上代ノ事ハ濛々トシテ確ト知ルヲ得ストスルニ由レリト、噫何ソ然ラン、皇權ニ關スル關セサルハ政治上ノ事ナリ、時勢ニヨリテハ純粹ノ學術モ直チニ人民政事ノ思想ニ大影響ヲ及ホスアリトスルモ、今日ハ古事記ノ講釋ノ爲メ感動セラル、時勢ニアラサレ



ハ、安心スヘキナリ、我祖先ハ海外ヨリ來リタリト云ヘ  
 ハ西人ノ侮ヲ受ケテ國權ヲ縮小スヘシト思フ者ハ膽力  
 ナキ小人ニ過キサレハ、毫モ顧ミスシテ可ナリ、而シテ上  
 古ノ事ヲ知ルヘカラストスルハ、寧ロ卑屈ノ妄見ナリ  
 トス、余ノ此篇ヲ作ルハ、其ノ能ハサルニアラス、爲サル  
 ナリノ意ヲ顯ハシテ、少ク妄見ヲ破ラントスルナリ、鏡  
 ナクシテ醜面ヲ知ラス、公然ト余ノ僭說ヲ懷クヲ誹リ、  
 誤解ヲ爲スヲ笑フ者アラハ、幸甚、

○衛生モ亦教育家ノ一責任乎（前號ノ續キ）  
 松山 誠二述

（第二、不當結婚）子女ヲ養育スルニ足ルノ才藝資産アラサ  
オンソイテフル、マルレシ  
 ル者或ハ年齢、體質、同系等ノ故ヨリ不健康ノ兒女ヲ産出  
コンサンギユイン  
 スヘキ恐アル者ノ結婚スル之ヲ不當ノ結婚ト總稱ス抑々  
 人口ノ繁殖ハ國家ノ安寧幸福ニ關スル者ナレハ適當ノ度  
 ニ達シテ止メハ、則チ頗ル賀スヘキヲナレト苟モ此度ヲ越  
 ヘテ愈々益々繁殖スルニ於テハ終ニ需要及ヒ供給ノ平衡  
 ヲ失シ民人住スルニ地ナク食スルニ穀ナク所謂弱肉強食  
 禽獸齧ナラサルノ觀ヲ現出シ愚ハ毫モ其愚ヲ守ラヌ智者

モ亦心ヲ不正ニ動カシ或ハ衣食ヲ兒女ニ給セス雨露ヲ老  
 者ニ凌カシメサル等實ニ言フニ忍ヒサルノ慘狀ヲ呈スル  
 ニ至ラン而シテ此慘狀タルヤ結婚其當ヲ得ルニ於ルモ尙  
 ホ且永世ノ後或ハ之ヲ呈出スルアランヲ懼ル況ンヤ不當  
 ノ結婚盛ニ行ハル、ニ於テチヤ但不當ノ結婚盛ニ行ハレ  
 タランニハ假令人口ノ繁殖未タ右ノ如ク甚シキニ至ラサ  
 ルモ早ク已ニ幼ニシテ非命ニ斃レ或ハ長スルモ才力ノ生  
 ヲ送ルニ足ルヘキナク空シク路傍ニ餓死スル者等續々現  
 出シテ遂ニ道德衛生ノ道モ之ヲ施スニ術ナキニ至ルベシ  
 人口ノ繁殖ハ頗ル速カナル者ニシテ英國ノ醫士某氏ノ  
 說ニ依レハ千八百十年ニハイングランド及ヒウエール  
 スノ人口合テ僅ニ一千万ナリシニ爾來毎年平均殆ント  
 二十萬ツ、ノ割合ヲ以テ増殖シ千八百七十六年ニハ二  
 千二百萬トナレリ故ニ今後之ニ準シ加フルニ重複倍量  
コンパランド、イングリッス  
 ノ理ニ從フテ増スルハ千九百二十年ニ至レハ或ハ四千  
 五百萬トナルモ未タ知ル可ラスト云ヘリ  
 コ、ニ不當ノ結婚ノ各種ニ就テ其害ヲ論センニ（一）才藝  
 資産アラサル輩ハ大概兒女ヲ擧クルモ之ニ適當ノ衣食ヲ



給セスシテ空シク天死セシメ或ハ偶々長セシムルモ自活ノ正路ヲ教フル能ハス徒ニ無頼ノ子弟ニ變セシムルヲ常トス(二)極テ早年或ハ老年ノ結婚ハ婚スル者ノ健康ニ害アリ且通例兒女ヲ産セヌ或ハ幸ニ之ヲ産スルモ其兒往々菲薄虛弱ニシテ中年以上マテ生存スルヲ稀ナリクエレツト氏ノ説ニ由レハ二十六歳ヲ過キサル成長婦人ノ三十三年ヲ越ヘサル成長男子ニ配スルヲ以テ最モ多ク小兒ヲ産出シ且最モ强健ナル小兒ヲ得ル者トスト云ヘリ(三)體質不良ノ者ノ結婚ハ必ス其害惡ヲ子孫ニ傳フルヲ論テ俟タズ

大喻ヘハ兩親共ニ勞瘵血統ナルキハ之カ兒ハ必ス著シキ勞瘵ヲ發シ又兩親ノ内一人ハ健康家系ノモノナルモ他ノ一人ハ勞瘵質ナレハ病害遺傳ノ勢力稍々減スルモ尙ホ全ク減セヌ從テ數兒ノ内少クモ一兒ハ必ス勞瘵ヲ發スルヲ免レサルカ如シ而シテ此弊ハ啻ニ勞瘵ノミナラス癩瘵及ヒ他ノ慢性諸病ニ在テモ亦然リ殊ニ精神諸病ノ如キハ極テ甚シトストクトル、ホルロー、氏ノ檢索ニ由レハ精神病者ノ内其遺傳ニ因スル者ハ常ニ百中ノ八十四ニ居ルト云ヘリ(四)遺傳ノ理ニ從ヘハ父祖身體ノ害惡ハ通例子孫ニ

傳ハリテ其身體ニ顯然表發シ或ハ偶々隱然潛伏スルモ永遠ノ内ニハ遂ニ必ス其身體若クハ其又子孫ノ身體ニ表發スルヲ免レサルナリ故ニ一系同血ノ男女相結婚スルハ其互ニ同一ノ害惡ヲ遺傳セルヲ勿論ナルヲ以テ之カ間ニ生ル、所ノ兒ハ兩惡重合ノ爲メ頗ル劇烈ナル害惡ヲ發表スルヲ常トス豈ニ懼レサル可ケンヤ然リ而シテ純然無害ノ家系ニ於テモ苟モ極テ親密ナル血縁アル者相結婚スルハ又必ス其產出スル所ノ子孫ノ身體若クハ精神ニ驚クヘキ病害ヲ發出スルヲ免レストス例之ハ、ドクトル、ベミス氏ノ檢索ニ由レハ三十四ノ同系婚姻中其七八兒ヲ得ス他ノ二十七ハ皆多少ヲ設ケテ小兒ノ總數百九十二人アリシニ内五十八人ハ嬰年若クハ早年ニシテ死没シ而シテ成長セシモノ百三十四人ノ内三十二人ハ虛弱、二十三人ハ癩瘵、四人ハ癲癩、二人ハ發狂、二人ハ啞、二人ハ盲、四人ハ白痴、二人ハ不具、五人ハ白皮、六人ハ視力減衰、一人ハ

イザツト 無踏病ニシテ五人ハ未タ報告ヲ得ス墮ニ四十六人ノミ粗アルビースホ健全ナルヲ得シト云ヒ又ドクトル、ホー氏ノ統計ニ從ヘハ十七ノ同系婚姻ニ由テ合計九十二人ノ小兒ヲ得タル



其四十四人ハ白痴、十二人ハ癩癩、一人ハ聾、一人ハ侏儒  
 ニシテ、塵ニ三十七人ノミ粗ホ健全ナリシト云ヘルカ如キ  
 以テ的證ト爲スヘシ此他同系結婚ノ懼ルヘキヲ明カニス  
 ルノ實例的證太タ多シト雖ヒ予ハ右ニ記スル所ヲ以テ正  
 ニ足レリト考フルカ故ニ敢テコ、ニ追録セス  
 上述ノ如ク飲酒、猥褻及ヒ不當結婚ノ弊害ハ極テ懼ルヘ  
 シト雖モ皆ニ此三者ノミナラス他ノ社會的原因ヨリ發ス  
 ル所ノ害惡ハ孰レモ皆多少懼ルヘキ者タルカ故世ノ衛生  
 家ハ勿論苟モ心ヲ學事ニ研キ自ラ教育家ヲ以テ任スルノ  
 人ハ必スヤ之ヲ輕忽ニ看過スルコトナク勉メテ防禦ノ法方  
 ナ考按セサル可ラサルナリ又翻テ所謂實物的原因ナル物  
 ナ見レハ飲食、運動ニ空氣、用水ニ季順、地質ニ道路、家屋  
 ニ或ハ溝渠、市街ニ一トシテ若シ其當ヲ得サルキハ民人  
 健康ノ度ヲ卑フシ害惡ヲ社會ニ流サ、ルハナキナリ去レ  
 ハ凡ソ心ヲ國家ノ安寧ニ社會ノ幸福ニ注クノ志士ハ誰レ  
 カ教フヘキ戒ムヘキハ之ヲ教戒シ除クヘキハ之ヲ除キ改  
 ムヘキハ之ヲ改メ以テ可及的害惡ヲ減少シ健康ヲ保護ス  
 ルヲ務メスシテ可ナランヤ况ンヤ教育衛生ノ任ニ當ル者

於テチヤ必ス他ニ卒先シテコ、ニ盡力セサル可ラサル  
 ナリ  
 末段ニ至テ尙ホ一言スヘキコアリ乃チ社會ノ寧福ヲ保護  
 スル爲メ教育家ノ心ヲ衛生ニ注クコノ緊要ナル理由ハ前  
 段所述ニ由テ已ニ明白ナリトシ更ニ一步ヲ退テ只々學校  
 衛生ノ一小局面ニ就テ考フルモ亦大ニ教育家ニ衛生ノ心  
 術ナクンハ非サル所以ヲ覺知スル是ナリ抑々教育家ノ責  
 任タルヤ主トシテ子弟ヲ薰陶シ其才能技藝ヲ研キ學識知  
 見ヲ博フシ又道德品行ヲ改良シテ天晴レ有爲傑俊ノ碩學  
 哲士ヲ養成スルニアルヘシト雖モ苟モ該子弟ニシテ半途  
 ニ健康ル失シテ業ヲ爲ス能ハス或ハ幸ニ業成ルモ體質薄  
 弱トナリテ後來能ク事ニ耐フルヲ得サランニハ教育家多  
 年ノ苦心モ空シク水面ノ泡沫ト一般勞シテ効ナキコトナ  
 ルノ弊アラン故ニ業ヲ授クルニ兼テ學生ノ健康ヲ保護ス  
 ルハ蓋又教育家ノ一責任タルヲ免レサルヘシ而シテ學舍  
 ノ建築、學生ノ年齡、授業ノ時間、學課ノ難易、勸學休眠ノ  
 度、飲食ノ種類時限及ヒ體操遊歩ノ度等ハ皆其適否如何  
 ニ由テ大ニ學生ノ健康ニ關涉スル者ナレハ世ノ心ヲ教育



ニ注クノ士ハ須臾モ之ヲ輕忽ニ看過ス可ラサルナリ諸以  
上續述スル所ハ固ヨリ簡短ナル畧論ニ過キスト雖モ亦以  
テ教育家ニ衛生ノ責アル所以ヲ證明スルニ足ルベシ

(畢)

○本邦新産鉄鑛畧記 岩佐 巖 述

世ニ鉄鑛ト稱スルモノ數多アリ曰ク磁鉄鑛曰ク輝鉄鑛曰  
ク褐鉄鑛曰ク赤鉄鑛曰ク黃鉄鑛曰ク硅鉄鑛等是レナリ然  
レモ其ノ鑛質ノ粗惡ナルト產出量ノ多寡トニ准テ鉄鑛ノ  
名ヲ附シ難キモノ亦タ少ナシトモ例ハ硫鉄鑛ノ如キハ  
其ノ產出スルノ地頗ル多ク且ツ其ノ量ハ極メテ夥多ナリ  
ト雖モ製煉スルノ方宜シキヲ得ス故ニ之ヲ經濟上ニ考視  
スルモハ其ノ成果以テ其ノ費ヲ償ハサルニ係リ現今尙ホ  
之ヲ鉄鑛ト見做サ、ルナリ然リ而シテ此他諸種ノ鉄鑛ヲ  
製煉シ以テ其鐵ヲ護ルノ方亦タ該要件ニ准スルモノ多シ  
故ニ年々歲々人其良法ヲ按スルニ苦辛シ以テ冶鉄ノ成績  
ヲ進メントス然ルニ天其辛苦ヲ憐察シ賜ヒシニヤ更ニ一  
種ノ鉄鑛ヲ産シ以テ人目ニ觸レシメタリ是レナン所謂炭  
鐵鑛ノ名ヲ得シモノナリ

ブラツクバ

抑モ炭鐵鑛ハ炭酸鐵中ニ石炭、粘土及ヒ石灰等ヲ駁雜ス  
ル者ニシテ地中ニ在テハ石炭層裡ニ藏積スルモノナリ然  
リ而シテ其成分タルヤ炭酸鐵、炭酸滿奄、炭酸石灰、炭酸苦  
土、礬土、珪酸、磷酸、水及ビ有機性炭化物ヨリ成ル即チ之ヲ  
灼熱スルモハ其重容ヲ減少シ又タ其中ニ含有スル所ノ石  
灰分ハ方ニ之ヲ溶解スルニ必要ナル生滓扶熔物ノ適量ニ  
足り而シテ其含砂粘土分ハ炭鐵鑛ノ鑄鑠ヲ扶助シ且ツ還  
元力ヲ進メ加之其石炭分ハ該鑛ヲ製煉スルニ際シテ要ス  
ル所ノ燃料ヲ減少シ而シテ其成果ヲ増殖スルモノナリ之  
ニ依テ是レヲ視レバ他鑛ニ就テ要スル所ノ熔煤物ヲ殊更  
ニ混和スルヲ要セサルノミナラス從テ製鐵ノ勞力ヲ省キ  
以テ良鐵ヲ製シ得ルハ實ニ絶美ノ鉄鑛ト謂ハサル可カラ  
ス即チ此ノ如キ鑛石ハ一千八百一年スコットランドニ於  
テ始メテ發見シ之ヲ製鐵ノ業ニ試ミタルチ其創始トナシ  
次ニ一千八百三十年再ヒ之ヲ同國內ニ於テ發見セリ又タ  
一千八百五十五年ニ至テ獨逸國、ウエストフエリヤ、ニ於  
テ此鑛石ヲ採掘シ而シテ之ヲ製煉スルニ冶鐵場ヲ新設ス  
ル實ニ夥多ナリ就中英吉利國ノ如キハ其製鐵業ノ隆盛ナ



ル年々幾百萬噸ノ鐵ヲ製出スルニ至リシハ世人ノ熟知スル所ナリ然リ而シテ其原鑛ヲ質スニ十中ノ九ハ悉ク炭鐵鑛ナラザルナシ蓋シ該鑛ハ鑄解シ易ク且極メテ僅少ノ燃料ヲ要求スルニ基スルナリ

然ニ余去夏八月中大學ノ命ヲ領シテ北陸ヲ巡歴スルニ際シ石川縣下越中國上新川郡西種村ニ詣リ當時漸ク開坑セラル石炭山ヲ一見スルニ炭脈連累トシテ限アルヲ知ラズ外觀以テ人目ヲ驚慰スルニ絶ヘタリ而シテ此炭脈間ニ亦多數條ノ石脈ヲ顯示セリ即チ之ヲ熟視スルニ通常ノ岩石ナラサルヲ觀察スルヲ得タリ仍テ尙ホ此石片ヲ試査シテ本邦未曾有ノ鑛石ニシテ即チ已ニ述タル如キ炭鐵鑛ナルヲ確認セリ今ヤ本邦製鐵ノ業タルヤ開坑以來未ダ數年ナラズシテ衰頽ニ趣クモノ已ニ其例ナキニシモ非ス即チ釜石鐵山ノ如キ是レナリ此時ニ際シテ天亦此ノ如キ良鑛ヲ惠與スルハ將ニ英吉利國ノ鐵山一時ニ山林ヲ伐盡シテ燃料ヲ亡ヒシキ偶然石炭山ヲ發見シ之カ爲メニ再ヒ鑛業ヲ振興セルガ如シ夫レ之ヲ奇偶トセンカ否國家ノ幸福ト云ハサルヲ得ンヤ

即余ハ歸京後此鑛石ニ定量試驗及ヒ還元鑄解試驗ヲ施セルニ其極メテ美質ナルヲ知り且ツ絶美ノ鉄粒ヲ獲タリ而シテ其熔解景況等ハ方ニ前述ノ如ク其品質ハ外國產物ニ寧口勝ルトモ敢テ劣ラサルヲ認メリ即チ左ニ此分析表ヲ記載シ参考ノ便ニ供セントス

百分率數	
第一酸化鉄	五〇、五八
炭酸	二三、五一
炭素	六、九〇
硅酸	六、六四
礬土	五、七八
第一酸化滿奄	〇、六五
石灰	二、五一
苦土	〇、八二
水	二、六一
合計	一〇〇、〇〇

批評

○外山大先生ノ駁論ヲ復駁ス

人權新說著者

學藝雜誌第十六號ニ外山大先生カ人權新說ノ著者ニ質ス



ト題セル文アリ披テ之ヲ讀ムニ其論頗ル痛快ナルニハ似  
 タレレ惜哉大先生ハ全ク人權新説ノ文ヲ誤解セラレシト  
 見エ甚ダ奇怪ナル説ヲ述ヘラレタリ蓋シ大先生若シ人權  
 新説ノ第五條ヲ今少シ念ヲ入レテ讀ミ玉ヒシナラハ決シ  
 テ此ノ如キ疎漏ナル議論ハ出テマシキニ斯クナカリシハ  
 甚ダ遺憾ニ堪ヘサルナリ左ニ其故ヲ説明センニ余ハ特ニ  
 ルウソウ氏及ヒ佛國顛覆黨ノ主張セル過激ナル天賦人權  
 説ノミチ天賦人權説ト認メテ駁撃セシニ非ス更ニ近世ノ  
 諸學士中ニ行ハル、最モ靜穩ナル天賦人權主義ヲモ併セ  
 テ全ク非トセシナリ近世諸學士中ニ行ハル、靜穩ナル天  
 賦人權主義トハ既ニ同條ニ於テ明カナルカ如ク唯吾人個  
 々カ實ニ人類タルニ足ルノ品位ヲ保有スルノ權利ノミチ  
 以テ天賦人權ト認ムル主義是レナリ故ニ此靜穩ナル主義  
 ニ於テハ彼ルウソウ派若クハ佛國顛覆黨ノ如ク人々個々  
 何事ニ就テモ自由ナリ平等ナリ杯云フコトヲ主張スルニ非  
 ス唯吾人カ皆實ニ人類タルニ足ルノ品位ヲ保有シテ他ノ  
 爲メニ妄ニ非人、奴隸視セラレサルヲ以テ天賦ノ人權ト  
 ナスモノナリブルンチヨリ一氏ハ天賦人權トハ結局人類

タルニ足ルノ品位ニ過キサルノミト云ヘリ  
 是故ニ余ハ特ニ過激ナル天賦人權説ヲ駁スルノミチ以テ  
 既ニ天賦人權説ヲ駁シ了レリトナスニ非ス又靜穩ナル天  
 賦人權説ヲモ併セテ駁撃スルニ足ルノ説ニアラサレハ敢  
 テ天賦人權説ヲ駁セルモノトハ爲サ、ルノ意ナルニ外山  
 大先生カ引証セラレタルボルク氏ベンサム氏以下ノ駁撃  
 説ニ至リテハ全クルウソウ派若クハ顛覆黨ノ過激主義ヲ  
 痛ク駁撃センカ爲メニ説ヲ立テタルモノナルコトハ其書中  
 ニ佛國人カ主唱スル天賦人權説ヲ駁撃シテ云々ト云ヒ或  
 ハ人ハ自由ナルモノニ生レ又始終自由ナルモノニテ在リ  
 (蓋シルウソウ派ノ格言ナリ)ト云フヲ駁シテ云々ト記セ  
 ルニテ明カナレハ是等ノ人々カ既ニ天賦人權説ヲ駁シタ  
 レハトテ是レハ唯過激ナル天賦人權説ヲ駁セシモノニシ  
 テ更ニ靜穩ナル主義ヲモ併セテ駁シタルモノトスヘカラ  
 サレハ余ハ右等ノ説ヲ以テ實ニ全ク天賦人權説ヲ駁シ了  
 レリトハ云フ能ハサルナリ余ハ外山大先生ノ教示ヲ受ケ  
 サルモ佛國顛覆以來過激人權説ヲ駁撃セル學者ノ世ニ多  
 カリシコトハ既ニ之ヲ熟知セリ決シテボルク氏ベンサム氏



等二三氏ニ止マルニアラス更ニ有名ナルヘーゲル氏スタ  
 ール氏等ヲ始メ殆ト枚擧スベカラサル程ナレハ哲學政治  
 學等ノ字書中人權若クハ性法ノ部ヲ披ケハ過激人權說ヲ  
 非トセシ論說ハ實ニ夥シキヲナリ此ノ如キ人々ヲモ猶非  
 天賦人權者流トスレハ余カ天賦人權者流ノ列ニ加ヘタル  
 ミル氏スベンセル氏フレンツ氏等ノ如キモ固ヨリ非天賦  
 人權者流トセサルヲ得サルナリ何トナレハ是等ノ人々モ  
 マサカニ過激人權論ニ心醉スルモノニハアラスシテ却テ  
 大ニ之ヲ駁撃シタレハナリ蓋シ此ノ如ク夥シキ學士ハ自  
 ラハ立派ナル非天賦人權者流ナリト思ヒ居ルコナルヘテ  
 レモ其實ハ矢張彼靜穩ナル天賦人權者流ノ範圍ヲ脱シタ  
 ルモノニハアラスナルナリ其故何トナレハ是等ノ學士ハ未  
 タ吾人々類ノ眞ニ他動物ト同源ニ出テタルモノナルヲ知  
 ラスシテ獨リ吾人々類ノミハ全ク特種貴重ノモノナリト  
 ノ自惚心ノ除カヌ人々ナレハ本來萬物ノ靈長タル特種貴  
 重ノ吾人々類ニハ縱令權利ト云フ名ハ附セラレヌモ一種  
 最モ高尊ナル品位アリテ此品位ハ吾人互ニ敬重セサルヘ  
 カラサル者ニシテ同一人類カ同一人類ヲ非人、奴隸視ス

ルカ如キコハ敢テ爲スヲ得ヘカラサルモノナリトノ考ハ  
 必ス眞底ニ殘リ居ルコト疑ヒナク加之斯ク高尊ノ品位アル  
 吾人々類ハ自由ニ他動物ヲ使用シ或ハ屠殺スルヲ得ヘキ  
 當然ノ權アリトノ考モ必スアルコト疑ヒナシ既ニ此考アル  
 以上ハ即是等ノ人々カ吾人々類ニ一個ノ天賦人權ナルモ  
 ノアラスト明言スルモ矢張天賦ノ人權アリト考フル天賦  
 人權者流タルニ相違ナケレハナリ蓋シ人類ノ眞ニ他動物  
 ト本源ヲ同クシテ本來ハ決シテ尊卑貴賤ノ別アルモノニ  
 非スト云フノ理ハ近世進化主義ニ據テ始テ明瞭トナレル  
 コナレハ未ダ此理ヲ知ラサル學士ハ吾人ニ特種貴重ナル  
 品位アリト認メタルハ敢テ疑フヘカラサルナリ  
 是故ニ余ハ決シテ此ノ如キ似テ非ナル非天賦人權者流ヲ  
 探シ出サント欲シテ骨ヲ折リタルニ非ス唯彼靜穩ナル天  
 賦人權主義ヲモ併セテ駁撃スルノカアル眞ノ非天賦人權  
 者流ハ未ダ有ラサルヤト種々ニ穿鑿シタルナリ而シテ靜  
 穩ナル天賦人權主義ヲ駁撃スルハ特ニ進化主義ニ據ラサ  
 レハ能ハサルコトナレハ余ハ進化主義ヲ信スル人々ニ於テ  
 始テ其人ヲ探シ出スコトヲ得タリシナリ靜穩ナル天賦人權



主義ヲ駁撃スルハ何故ニ進化主義ヲ信スルノ人ニ非サレ  
 ハ能ハサルヤト云フノ理ハ既ニ論スル所ニ於テ明カナル  
 ヘク且ツハ吾人カ他動物ト本源ヲ同クスル以上ハ動物世  
 界ヲ制スル所ノ萬物法ハ矢張吾人々類ヲモ制スルヲ必然  
 ナリトノ理モ決シテ疑フヘカラス此理既ニ疑フヘカラス  
 ル以上ハ彼動物世界ニ行ハル、競争淘汰ノ作用モ亦吾人  
 々類世界ニ行ハルヘク而シテ競争淘汰ノ動物世界ニ行ハ  
 ル、ハ動物ノ遺傳ト變化トニ於テ優劣ノ等差アルヨリ優  
 者劣者ノ別起ルニ源スルモノナレハ此事モ亦吾人々類ニ  
 於テ同一ナルヘキハ當然ノ理ト云ハサルヘカラス果テ然  
 ラハ吾人個々ノ身心ハ本來互ニ優劣強弱アリテ決シテ平  
 等ナルニアラサルモノナレハ優者劣者ノ競争ニ於テ優者  
 カ勝チ劣者カ敗ルハ決シテ動スヘカラス萬物法ノ定規  
 ダルヲ明カニシテ是レ即チ人々個々ニ天賦人權存セサル  
 所以ノ最モ確明ナル証トスヘキナリ  
 以上論スルカ如キ理由ナルカ故ニ非天賦人權ハ外山大先  
 生一人ハ陳腐ニ思ハル、ナルヘケレモ眞ノ非天賦人權説  
 ハ決シテ斯ク陳腐ノモノニアラスシテ實ニ輓近始テ起リ

タルモノナリ即進化説ノ開ケシ以來始テ起リシモノナリ  
 而シテ余カ非天賦人權者流トナセルカルチリ氏シユフレ  
 氏等ハ皆進化主義ヲ信シテ始テ實ニ天賦人權ノ存在セサ  
 ルヲ悟レルモノナルヲハ其著書ニ於テ明カナルヲナリ外  
 山大先生ハ博涉強識ヲ以テ鳴レル大學士ナレハ是等ノ書  
 ハ夙ニ涉獵セラレシヲ固ヨリ論チ俟タサレハ余ハ敢テ贅  
 言セサルナリ  
 頃日或人百人一首中中納言匡房卿詠歌ノ替歌ナリトテ  
 余ニ贈リタリ面白ケレハ左ニ錄シテ覽者ノ一笑ニ供ス  
 牛込の天狗の鼻のひげたり  
 外山のこまりいかよあるらん  
 外山大先生ノ援軍都督タル杉浦君ノ侵撃ニ答砲セン  
 ト欲ス都督ハ余カ自己ノ新發明ニモアラサル主義ヲ記セ  
 ル書ニ新説ノ名ヲ命シタルハ不可ナリト云ヘリ然レモ新  
 説新論新編杯云ヘル書名ハ必スシモ自己ノ新發明ニ限ル  
 ニアラズ輓近始テ世ニ出テタル新主義ヲ記セル書ニ右様  
 ノ書名アルハ往往少シトセス全体新論博物新編等ノ如キ  
 蓋シ其一例トスルニ足ル以テ余カ新説ノ名ヲ命スルノ不



可ナラサルヲ知ルベシ都督尙再侵ヲ試ムルノ奇策アリヤ  
否

曰アリ他ノ奇策アルニアラス糧ヲ敵ニ資ルノミ夫レ著  
者ハ此結末ニ於テ非天賦人權主義ハ自己ノ新發明ニ非  
サルヲ表シ余ノ推測ニ違ハス耳新シキ說ナルヲ以テ新  
說ノ名ヲ命シタリト云ヘリ然レモ著者ハ己ニ書名ニ著  
ノ字ヲ冠シテ新發明ノ意ヲ寓スレハ是レモ亦ターノ不  
都合ト云フベシ加之ナラス著者ハ古人ノ例ヲ擧ケテ其  
不可ナラサルヲ證明スレモ余ハ更ニ其必ス古人ヲ是ト  
スヘキ所以ヲ見ス古人ノ用ヒタル語トモ若シ其非ナ  
ルヲ知ラハ之ヲ改ムルモ亦學士ノ任ナリ余カ斯ク書名  
ニ喋々スル所以ノモノハ抑モ故アルナリ如何ニ書名ナ  
リトテ苟モスルトコロアレハ其書中ニモ亦苟モスルト  
コロナキヲ保シ難ケレバナリ余ハ固ヨリ專修シタル學  
問ニアラサレハ一々此書ヲ批評スルニ由ナシト雖トモ  
今試ニ其一ヲ擧ケテ之ヲ評センニ第六條ニ云ヘルコトア  
リ(進化主義ヲ以テ天賦人權主義ヲ駁撃スルハ是レ實  
理ヲ以テ妄想ヲ駁撃スルナリ之ヲ一撃ノ下ニ碎粉スル

何ノ難キヲカコレアラン)云々余ヲ以テ之ヲ見レハ實  
理ヲ以テ妄想ヲ駁スルハ却テ難キトコロアル如シ譬ヘ  
ハ長刀ヲ掉テ幽靈ヲ斬リ大砲ヲ放テ屋氣樓ヲ碎クニ異  
ナラス已ニ非天賦人權主義アリ又何ソ是天賦人權主義  
アルヲ怪マンヤ即チ孟軻性善ヲ說ケハ荀卿性惡ヲ唱フ  
ルト一般ナリ右ノ譯ナレハ人權新說一冊ニテ天賦人權  
主義カ全ク消滅スルトモ思ハレス若シ果シテ然ラハ非  
天賦人權主義カ著者ノ新發明ニ非サルハ却テ著者ノ爲  
ニ賀スベキナリ  
杉浦重剛再識

田口卯吉君ノ反譯サレタル大英商業史

天拙居士

予嚮ニ田口卯吉君ノ反譯サレタル大英商業史ニ付キ聊カ  
卑見ヲ述ヘシニ君ハ經濟雜誌中ニ態々謝辭ヲ述ヘラレ予  
ハ幾ント赧面ニ堪ヘズ然レモ余ハ君カ有識ノ士タルヲ知  
レハコソ敢テ喋々セシ所以ナレハ君カ今過チ飾リ非チ遂  
ルヲ欲セザルニ於テハ予素リ之ヲ怪マザルナリ兼テ予ハ  
卑見ヲ第一章ニ止メ後章ノ如キハ之ヲ世間ノ公評ニ任ス  
ベシト思ヒシカ後章モ一覽アリタキ旨ヲ教示セラレタル



ヲ以テ面目ノ餘リ又繙閱ヲ思ヒ立チ意見ノ儘ヲ記セント  
 ス君訂正ノ際若シ參覽ヲ賜ラハ實ニ本懷ノ至リナリ尤モ  
 第二章ハ第一章ニ比スレハ誤謬モ至テ少ク其段ハ恐悅ノ  
 次第ナリ

田口君ハ故意ニ原意ニ異テ反譯セラレタル件モアル旨ヲ  
 教示サレタリ素リ彼我文法ノ同シカラサル時トシテハ文  
 章ノ工合ヲ變シテ妨ナキノミナラズ又之ヲ變セザルヲ得  
 ザル場合モアリ然レモ爲メニ原文ノ意ヲ害スルハ餘リ好  
 マシキ事ニ非ズト思考ス序デナカラ之ヲ大英商業史ノ反  
 譯者ニ質ス

第二十四葉 反譯「余カ前章ニ於テ說明セシ所ノ諸發明  
 全ト同時ニ英國ニ於テ道路ノ修繕、堀河ノ開疏、港浦ノ浚  
 拓、其他内外交通ノ便ヲ助クルノ工業ヲ諸處ニ興起セ  
 シハ眞ニ國家ノ幸ト云フベシ」  
 原文ノ意「前章ニ於テ說明セシ所ノ諸大發明ト同時ニ  
 英國ニ於テハ道路ノ改修、堀河ノ開疏、港浦ノ浚拓、殊ニ  
 又内外ノ交通ニ關スル經濟上ノ眞理ニ注意シタルハ實  
 ニ國家ノ幸ト云フベシ」

眞理ニ注意スルハ原因ニシテ工業ヲ興起スルハ其結  
 果ナリ然レハ此二件ハ互ニ代用スヘキ者ニ非ズ  
 第二十五葉 反譯「ウオルスレイ及ヒマンチェストルノ間  
 ニ運路ヲ開クノ事一箇ノ大問題トナレリ」

原文ノ意「ウオルスレイトマンチェストルトノ間ニ運路  
 ヲ開クノ方法ハ一箇ノ大問題トナレリ」  
 右兩所ノ間ニ運路ヲ開クノ緊要ナルハ當時已ニ認  
 ムル所ナレモ只其之ヲ實行スルノ方法ノミ當時ノ難  
 題トナリタリ

全葉 反譯「初メニハウオルスレイノ小流ヲ堀リ廣メテ通  
 船セントノ議一時ニ盛ナリシカドモ二處ノ間ニ堀河ヲ  
 開クコト却テ容易ナリトノ計算アルヲ以テブリッヂウ  
 ートル侯ハ技術師ブリンドリーヲシテ先堀河ヲウオル  
 スレイヨリスタフルドニ通セシメ」  
 原文ノ意「初メウオルスレイノ小流ヲ堀リ廣メテ通船セ  
 シムベシトノ議アリシカ此幾ント成功ヲ期シ得ヘキ業  
 ニ非ザリキ次テ右二處ノ間ニ堀河ヲ開クベシトノ説起  
 リ其企業ハ稍ヤ見込ミアル者ト覺ヘラレタリ是ニ於テ



ブリッジウオタル侯ハ右起業ノ許可ヲ乞ヒ當時有名ノ工師ブリンドリト氏ヲ聘シテ先ツ堀河ヲウオルスレイト

兼テ成功ノ見込ミナキ位ノコナレハ其議ハ一時起リタリト雖ヒ決シテ盛ナリシニハ非ズ

全葉 反譯「堀河ノ通船起ルトキハ馬力ヲ用フルヲ要セズ故ニ蓄馬ノ數減少スベシ海上ノ商賣ヲ爲スヲ要セズ故ニ海軍ノ力衰弱スベシ」

原文ノ意「堀河ノ通船ヲ盛ニセシカ蓄馬ノ數ヲ減シ沿海ノ貿易ヲ害シ而シテ海軍ノ衰弱ヲ來タスヘキハ自然ノ勢ナリ」

第二十六葉 反譯「國ノ嶮隘ヲ闡キ礦物ノ產出ヲ便ニシ外國物產ノ輸入ヲ開クハ内外ノ交易ヲ奮起セシメ諸製産ノ事業ニ活氣ヲ與フルノ結果アルヲ知ラザルノ人ナ

原文ノ意「全國ヲ開放シ我カ礦物ヲシテ易ク其之ヲ要スルノ地ニ達スルヲ得セシメ外國ノ物產ヲシテ易ク我

カ内地ニ入ルヲ得セシメハ從來存スル所ノ製産事業ハ益々活氣ヲ加ヘ其他内國商業ニシテ新ニ起ル者アルヘク而シテ外國ノ貿易モ亦ダ從テ進ムヘキヲ知ラザル徒ナリ」

第二十七葉 反譯「此時未ダミルトンノ時代ヲ去ル甚タ遠カラズ」

原文ノ意「ミルトン曾テ行旅艱難ノ狀ヲ寫シタル詩アリシカ其慘狀ハ當時猶未ダ全ク跡ヲ絶ザリキ」

第二十八葉ト九葉ノ交 反譯「千七百六十四年ニ上下二院ノ議官ハ封筒ニ其名ヲ記スルヲ以テ無賃ニテ差出シ得ルノ特許ヲ得タリ」

原文ノ意「千七百六十四年マテハ上下兩院ノ議員ハ封筒ニ其名ヲ記セハ無賃ニシテ書狀ヲ郵送スルヲ得タリ」

千七百六十四年ニ此特權ヲ得タルニ非ズ當年ニ至リテ此特權ハ廢止セラレタルナリ

第二十九葉 反譯其後郵船ノ開設アリテハルウイ、チ郵船四艘ハゼルマンニ發シド、ヴェル、郵船六艘ハカレイ



チステンド及ビフラッシニ發シワフルマウス郵船五艘

ハ北米及ヒ西印度ニ發ス其費年々一萬磅ナリ

原文ノ意「セルマンへ郵便物ヲ送ルニハハルウイッチ郵

船四艘ヲ以テシカレイオステンド及ヒフラッシングへ

ハドバル船六艘ヲ以テシ北亞及ヒ西印度へハフルマス

船五艘ヲ以テシ而シテ其一年ニ費ス所ハ僅ニ一萬磅ニ

過キザリキ

第三十葉 反譯「其免許狀ハ千七百六十四年ト千七百八

十一年ニ改正シ兩年共ニ政府ニ若干ノ貸與ヲ爲セリ

原文ノ意「其營業免許ハ千七百六十四年限リナリシカ

當銀行ヨリ若干ノ金員ヲ政府へ貸與スルコトヲ結約セ

シ爲メ其報酬トシテ更ニ免許ノ期二十一年ヲ延セリ

第三十二葉 反譯「マンチェストルハ商社未タ多カラズト

雖モ既ニ活潑ニ繁榮ナル製造都會ノ中心トナレリ

原文ノ意「マンチェストルハ未タ全ク府合ノ体ヲ備ルニ

至ラズト雖モ活潑ニシテ繁榮ナル製造町村ハ己ニ其四

邊ニ充滿セリ

第三十四葉 反譯「終ニ職人ノ連合ヲ禁シ之ヲ密告スルモ

ノニハ賞譽ヲ與フルニ至ル

原文ノ意「食物商賣人等カ連合シテ食物ノ價ヲ騰貴セ

シメ職工等カ連合シテ給金ヲ騰貴セシムルハ國法ニ背

クモノナリトシ而シテ之ヲ密告スルモノニハ褒賞ヲ與

ルニ至ル

第三十六葉 反譯「政府ノ宜シク爲スベシト定メタル主務

ハ人作ヲ以テ人民ノ職業製産ノ不足ヲ補助シ父母ノ愛

情ヲ以テ保護ヲ加ヘ且ツ政府ノ保護ヲ要スルト思考シ

タル若干ノ職業ヲ進歩セシメンガ爲ニハ其他ノ職業ニ

租稅ヲ課シ民間ノ事業ニ干渉スルモ之ヲ施行セザルベ

カラズトセリ幸ニシテ此政略ハ常ニ成功ヲ見ザリキ

原文ノ意「政府カ民間ノ事業ヲ監護スルハ宜シク父母

ノ慈子ニ於ル如クナルベシ人民ノ職業製産ニ不足ナル

所アレハ宜シク人造ノ方便ヲ以テ之ヲ補助スベク否ナ

官ノ保護ヲ受クベキ者ト認ルルハ其事務ノ取扱ニ立入

ルモ亦妨ナシトセリ然レモ斯ル政略ヲ主張セシ者カ毎

ニ其目的ヲ達スル能ハサリシハ實ニ國家ノ大幸ト云フ

ベシ



第三十七葉 反譯「マンチエストルノ製造人及ヒグラスゴ

一ノ職工等ハ製造品ノ諸稅ヲ廢止セシメテ議院ニ強請シ小民ノ職業ヲ攪亂セザランコトヲ哀訴セリ」

原文ノ意「マンチエストルノ製造家及ヒグラスゴ一ノ職工等ハ製造品ニ課セル諸稅ノ廢止ヲ主張シ又政府ガ尙ホ幼穉ナル製造ヲ束縛スルナカラシメテ議院ニ強請セリ」

第三十八葉 反譯「商業製産共ニ攪亂セラレ製産人ヲ保護

セント欲シテ其効ナク却テ消費者ヲシテ大ニ損害ヲ蒙ラシメタリ」

原文ノ意「商業製産トモ均シク攪亂セラレ蓋シ政府ハ徒ニ製産者ヲ利セント欲シテ消費者ノ損益ニ至テハ更ニ之ヲ省ミザリキ」

第三十八葉ト九葉ノ交 反譯此ノ如キ立法ノ精神ヲ變換

シ此ノ如キ製造人及ヒ職人ヲシテ喧鬧ノ結果ヲ瞭知セシメンニハ大有爲ノ人ニアラザレバ手ヲ下スコト能ハズ」

原文ノ意「此ノ如キ立法ノ大ニ眞理ニ反シ又實用ニ適

セザルコトヲ看破シ而シテ製造家及ヒ職工ヲ振起シテ其要求ハ決シテ實益ヲ來タスヘキ者ニアラザルコトヲ了知セシメンガ爲メニハ當時實ニ不世出ノ才ヲ要シタリ」

第三十九葉 反譯「何レノ時代ト雖モ國民ハ其外部ノ狀態衣食住ヲ進歩セシメンガ爲メニ種々考究スル所アリ唯其目的ヲ達スルノ手段ニ至リテ甚ダ矇昧ナルノミ譬ヘ

ハ希臘人ノ如キ般富ヲ望マザルニアラズト雖モ格外ニ遊逸怠惰ニ流レ唯政府ヨリ補給ヲ得ンコトヲ是レ望メリ」

原文ノ意「何レノ時代ヲ問ハズ何レノ國ヲ論ゼズ人民ハ必ス<sup>○</sup>身体上<sup>○</sup>苦樂<sup>○</sup>並ニ物質上<sup>○</sup>衣食住等ノ<sup>○</sup>精練<sup>○</sup>狀態ヲ進歩スルコトヲ付キ種々工夫シタルハ疑チ容ルベカラズト雖

モ其目的ヲ達スルノ方便ニ至リテハ極テ疎ナル者ノ如シ現ニ希臘人ノ如キハ曾テ富有チ屑トスル者ニ非ズト雖モ其遊惰ニ安セシコト殊ニ甚キトミナラズ常ニ政府ヨリ補給ヲ得ンコトヲ希望セリ」

第四十葉 反譯「羅馬ノ執政者ハ身ヲ降シテ製産ノ事理ヲ聞クコトヲシ焉ソ其利益ヲ知ルヲ得ンヤ」



原文ノ意「製産ノ事ハ羅馬ノ政事家ノ蔑視セシ所ナレハ自ラ下テ其仔細ヲ推究スル等ノ事ニ至テハ素リ爲サ  
ル所ナリキ蓋シ彼未ダ製産ノ要ヲ知ラザル者ナリキ」

全葉 反譯「羅馬帝國既ニ倒レ野蕃ノ酋長諸方ニ群居シ海  
内鼎沸スルニ至リ人々復タ心ヲ製産殷富ニ留ムルモノ  
ナシ然ルニ伊太里ノ諸府商業製産ヲ以テ富ミ且強ナル  
ニ及ヒテ始メテ世人ヲシテ製造ト外國交易トノ一大事  
タルコトニ屬目セシメ」

原文ノ意「羅馬帝國既ニ滅ビ野蕃ノ外人四方ニ出沒シ  
海内鼎沸スルニ至リ人々堵ニ安ンセズ新タニ富ヲ起ス  
ル方ヲ思ハザルノミナラズ其從來所有セル富ヲ保存ス  
ルヲサヘ勉メザリキ然レモ伊太里ノ諸府カ全ク商業ト  
製産トノミニ因テ其富強ヲ致シタルニ及ヒ當時心ヲ經  
濟ノ道ニ注ク者又筆ヲ此道ニ執ルノ徒ハ始テ製造ト外  
國交易ノ緊要ナルヲ認了スルニ至リタリ」

第四十二葉 反譯「アダム、スミス氏カ富國論ハ當今經濟  
學士ノ所論ニ及バズト雖モ然レモ經濟學ノ檢究ニハ統  
計學ヲ必須トスルコトヲ表示セリ」

原文ノ意「アダム、スミスガ統計學ニ於ル未ダ近世ノ經  
濟學者ノ如クナラズト雖モ統計學カ經濟學ノ推究ニ必  
須ナルヲハ已ニ其富國論ニ於テ之ヲ認メタリ」

アダム、スミスハ英國經濟學ノ元祖トサヘ云ハル、  
人ナリ而ノ近世ノ經濟學者ハ多ク其所論ノ基礎ヲス  
ミスノ富國論ニ取ル者ノ如シ然ラハ強ク富國論ハ當  
今經濟學士ノ所論ニ及バズトモ斷シ難シ

全葉ト四十三葉ノ交 反譯「余ガ爲ス所ノ方法ハ世人ノ未  
ダ試ミザル所ナリ余ハ猥ニ比較級又ハ最上級ノ語ヲ用  
キズ又妄リニ想像ヲ基キトシ是非ヲ決セズ余ガ久シク  
希望シタル社會上ノ算術ニ據リ數、若クハ度、若クハ量  
ヲ以テ長短輕重ヲ示サントシタリ故ニ人情ノ一般ニ顯  
レ世間ノ常事ニ基キスヘキ源由ヲ探究シ一人一箇ノ特  
別ナル性質嗜好情欲ニ關スル者ハ之ヲ他ノ推測ニ任ス  
原文ノ意「予カ適用スル所ノ方法ハ決シテ尋常ナラズ  
蓋シ予ハ言語上ノ空比較ト想像上ノ空論ニ因ラズ全ク  
數若クハ量若クハ度ニ因テ予カ意見ヲ表出セントス予  
ハ久シク天下ノ事物悉ク之ヲ算數ニ歸セシメントナ思

ハ久シク天下ノ事物悉ク之ヲ算數ニ歸セシメントナ思



ヒシカ此其一例ナルノミ即チ予ノ眼目ハ天然ノ現象ニ就テ其理由ヲ探知スヘキ者ヲ取リ彼ノ性質嗜好情欲上ヨリ發スル空理ノ如キ人々ニ因リ變更スルコトヲ得ヘキ者ナレハ予ノ知ル所ニアラザルナリ

雜錄

○儒論上

杉浦正臣稿

儒之所以爲儒者。果何在也。剖析性理乎。彫琢文章乎。看破萬卷乎。揣摩言論乎。此數者一技藝耳。何足以稱儒乎。然則何如斯可謂之儒矣。曰。其生也。道足以維持四海。其死也。德足以利澤萬世。如此者斯可謂之儒矣。悲夫。後世之儒。學宗孔子。而反失其旨者。比々皆是。所以然者。蓋坐於舖其糟而遺其精醇而已。抑儒者之道。淵源於孔子。則今欲明其道。自非就孔子之所行而求之。則烏得無失乎。夫孔子以大聖之資。生於澆漓之世。欲行濟世澤民之志於天下。故苟有召焉者。則不擇其國而就之。其不臣如公山弗擾佛勝。召之則欲往焉。蓋欲使其不臣爲臣也。其亂行如南子。召之則亦往見焉。蓋欲使其亂行有行也。可見其氣象之豪且大也。且如其斬倡優墮三

都誅少正卯。莫非大豪傑之舉焉。故孔子之至於是邦也。敵國皆懼而沮之。其在魯也。齊人曰。魯用孔丘。其勢危。又曰。孔子爲政必霸。其在楚也。陳蔡大夫謀曰。孔子用於楚。則陳蔡用事大夫危矣。其見憚如此。乃知孔子之爲學。其所期在行之於身而已矣。在施之於世而已矣。何齷齪於談論晦暗之間乎。然則儒者之道。可得而知也。如孟子。亦以儒自任者。其學非不博也。其論非不正也。其理非不邃也。其文非不美也。然當其遊事於諸侯也。動輒不免迂濶之譏焉。而未聞有一邦之懼而沮之者也。乃知孟子之爲人也。特戰國辯士之流耳。其講仁義之道。固非無補於世也。雖然。生於搏噬攘奪之世。欲施唐虞揖讓之治。猶緣木而求魚也。當是之時。苟欲濟世澤民耶。非用霸道。則安得收其功乎。而子墨子則喋々辨王霸之道。刺管仲之業。何其所見之不卓。而氣象之不大也。以之推之。假令孟子得志於時。豈能保成撥亂反正之業哉。吾恐其所謂功烈如彼卑者。將不在於彼而在於此也。抑孔子亦嘗論仲。爲不知禮。又爲器小者。是惜其安於小成而已。故論其事功也。不獨不譏之。深與其仁。則其微旨可知也。然則孟子之學。未能入孔子之室也。必矣。豈可與孔子並稱乎。至荀子則亦能守儒之



道。其所見自有確乎不可拔者焉。而如其以人性為惡。以仁義為偽。雖未免過激。然亦是矯世之論。其勢不得不然也。李斯以其弟子相秦。能使之帝。蓋荀子之薰陶。與有力焉。由是觀之。荀子或得孔子之精醇。而孟子或不免舖孔子糟粕也。然而後儒不察於此。旋獨心醉於孟子。惜々稱之。於是乎儒風一變。其弊也。徒溺文學理論。而不省探履實踐之業。遂使儒道為一技藝。可勝慨哉。如唐韓愈。亦一代之儒宗也。而猶且稱之曰。孔子傳之於孟軻。何獨恠乎後儒之誤道耶。嗚呼。儒之施德道於四海於萬世者。吾不得而見之矣。得見知儒之所以為儒者斯可矣。

○天地行

天地有所樂。碧雲吹裂金鳥躍。亂峯飛舞海濤呼。萬松奏樂響洞壑。天地有所悲。黃沙慘澹商飈吹。斜陽蔓草迷秋蝶。古月空林泣子規。天地何所哭。春雨瀟々暮江竹。天何所歌。急電打節雷鳴鑼。天地醉時花作臉。天地怒時霜作臉。君不見天地有時幾變更。苦樂不異世人情。江河亦應一朝涸。日月何必終古明。嗚呼。日月長難照。古鬼新鬼誰復吊。問天不答地無聲。小人痛哭大人笑。

槐南云。身置天地之外。口嘗苦樂之間。方纔做出這般奇句。雖莊生逍遙遊。恐亦輸一着。

竹翠云。外山尚令兩先生。既有新體詩之著。而奇句妙案頓驚江湖矣。種梅子之此作。可謂奇想來天外。則亦得新體之真面目者乎。

○錫磊雲雀詩

錫磊雲雀詩。春泓小史譯。去歲予之來。劍舞里也。居無幾和田垣士謙亦來。寓于東隣第九舍。常時來往。論東西洋學術文章之短長。所得多矣。頃者士謙偶出。錫磊雲雀詩。引格壘壘上。感懷詩例。使予譯焉。予乃試作。此譯似之。錫磊英。國人。天性能詩。西曆一千八百二十二年溺水而死。年甫二十八餘。舉世惜焉。此詩原語凡二十一段。每段五句。前四句交用六言五言。後一句用十言。音韻如神。譯詩亦二十一段。每段五句。前四句交用六言五言。獨第六句。用十言。一則不為詩。因換以七言。姿態格調。雖不及原詩。遠矣。順序體裁。則畧悉之。東洋詩家幸不吝。規律之新。而可矣。時明治十五年六月念二。來汝空中神物。汝豈尋常鳥。駕輕羽。弄好音。高舉在。縹



渺不<sub>レ</sub>是天上<sub>一</sub>亦塵表、

一層々離<sub>レ</sub>娑婆、杳然如<sub>レ</sub>飛霞、窈窕入<sub>レ</sub>彼蒼々、雲程不<sub>レ</sub>生

波、歌且登兮登且歌、

天將<sub>レ</sub>晚日將<sub>レ</sub>落、暖靄垂<sub>レ</sub>疏箔、容與而游<sub>レ</sub>其上、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>命

之薄、前身必然是至樂、

暮色之紫四來、與<sub>レ</sub>汝相追隨、汝乃如<sub>レ</sub>日中星、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>

之、獨聽<sub>レ</sub>其音之怡々、

東方白<sub>レ</sub>夜陰徙、殘蟾淡<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>水、徐々而収<sub>レ</sub>其魄、汝或與<sub>レ</sub>之

似、處所可<sub>レ</sub>察不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>指、

初夜纖雲點<sub>レ</sub>空、素娥出<sub>レ</sub>其中、銀光滿<sub>レ</sub>于宇宙、汝或與<sub>レ</sub>之

同、汝之音無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>通、

汝爲<sub>レ</sub>何我不<sub>レ</sub>識、何物最相類、假令天邊彩虹、吹<sub>レ</sub>瑤瑤雨、

墜、何若汝音散<sub>レ</sub>清吹、

或想空谷逸民、苦吟賦<sub>レ</sub>陽春、悲<sub>レ</sub>榮枯、憐<sub>レ</sub>盛衰、遂動<sub>レ</sub>天下

人、使<sub>レ</sub>之一唱三歎頻、

或想深宮靜女、纏絲恨<sub>レ</sub>孤處、心所<sub>レ</sub>思人不<sub>レ</sub>知、絃間漏<sub>レ</sub>情

緒、無言之語婉<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>語、

或想幽砌金螢、與<sub>レ</sub>露競<sub>レ</sub>嫂婷、人不<sub>レ</sub>知而不<sub>レ</sub>慍、一身渾曜

靈、獨自<sub>レ</sub>深叢、放<sub>レ</sub>孤燐、

或想薔薇一頰、含<sub>レ</sub>羞隱<sub>レ</sub>綠葉、軟風徐來誘<sub>レ</sub>之、漸次呈<sub>レ</sub>嬌

靨、奇香薰殺狂蜂蝶、

或想春草如<sub>レ</sub>烟、微雨覺<sub>レ</sub>其眠、凡此般之諸物、自然妍則妍、

比<sub>レ</sub>之汝詩、差<sub>レ</sub>天淵、

神乎我將<sub>レ</sub>問汝、夕陽何所<sub>レ</sub>貯、出<sub>レ</sub>于情、發<sub>レ</sub>于酒、世間多<sub>レ</sub>

綺語、未<sub>レ</sub>聞神韻與<sub>レ</sub>汝伍、

凱旋歐讚神詞、名匠凝<sub>レ</sub>其思、非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>美非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>雅、若比<sub>レ</sub>之

汝詩、浮華有<sub>レ</sub>痕憾或遺、

顧何等別乾坤、何等別山川、何等逍遙自適、何等好艷綠、此

間獨爲<sub>レ</sub>汝所<sub>レ</sub>專、

生來不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>貧窶、塵累不<sub>レ</sub>接<sub>レ</sub>武、不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>外物<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>羈、不<sub>レ</sub>爲

人所<sub>レ</sub>咻、有<sub>レ</sub>情不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>情中苦、

是一睡是一醒、坦然忘<sub>レ</sub>死生、不<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>人間齷齪、否則心易

驚、如<sub>レ</sub>此好音何以成、

吾人常顧<sub>レ</sub>左右、區々疚<sub>レ</sub>其首、快笑底亦有<sub>レ</sub>憂、絕代鈞天

奏、亦皆出<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>悲人口、

雖<sub>レ</sub>然吾猶深疑、饒使<sub>レ</sub>吾人兒、生來不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>一淚、心不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>



安危ハ眞樂否レ可ニ與レ汝期一

汝音之於ニ騷客ニ愈聞感愈劇、百琴瑟不足云、萬卷亦辟易、

汝音眞成金石擲、

嗟汝音既如斯、汝何獨自私、願分ニ其半ニ傳レ我、々將下施ニ

諸詩ニ以使<sub>甲</sub>後世永聞<sub>乙</sub>之

○湘南秋信 傲新体

昨日けふと思ひしも

旅ふのれぬ苦しきよ

雲の通路斷へむとも

あすの來よけん友ごより

たまふのあきど其さへも

有るものとして無りける

いかよ見ものか其とても

泣くよあかれず兎や角と

知るや知らずや秋の霜

哀れを見舞ふ氣合あり

あると馬入又馬を侶

大和心のやる瀬なき

相摸 鈴木券次郎郵送

早一月の旅衣

眺むるもの空の雲

斷へくあるの女の面

あさつては又親や妹

要事のけて何もかも

まゝて王子の紅葉だも

想ひやるのみ詮術も

案し暮すの愚のさも

千艸よかより照月も

木の葉の落る音つれも

まゝの雨降又雨又拭

思案かけ首池の鳥

都の人よ去らせんも 外よのわたり是とるも

今年のみより豊けさよ 民の命のよる紐

來るや春の事までも 嬉しく思ひ云まくも

君が代なれや有がふし 白きを語る丹き肝

田舎れ住居よし而も 露の恵みの深きよも

酔て管まく其代り 東京の模様知らせたるも

寄 書

○道德ノ大本ハ何ニ因リテ定メン乎

凡ソ夫レ人類ノ禽獸ニ異ナル所以ハ、衣食住ノ完全華美

ナルノミニアラザルナリ、亦感覺情意ノ發達セルノミニ

アラザルナリ、而シテ主トシテ理想ヲ構造シ倫理ノ大本ヲ

發見シテ世ノ所謂道德ノ思想ヲ有シ且之ヲ實行スルノ一

點ニ歸スルニアルナリ、古來少シク哲學海ニ其棹ヲ入レ

タル者ハ、皆己レカ理想ニヨリテ倫理ノ大本ヲ一定セン

ヲテ試ミザルハナシ、是レ則チ人類ヲ禽獸ヨリ區別シ、且

ツ彼ノ完全ノ眞理界ニ達セシメント欲セシヨリ出デタル



ナリ、  
 世上ノ淺露短才ナル輩ハ、云ク、哲學者ハ、皆天下ノ害物、無  
 用ノ長物ニシテ、其云フ所ハ皆空想迷夢、少シモ社會ノ實  
 用ニ適スルナク、彼ノ倫理ノ大本チ一定ニセントスルハ、  
 猶ホ空中ニ城郭チ作ラントスルニ同シク、唯、無益ノ徒勞  
 ニ過キズト、嗚呼何等ノ狂言ヅヤ、難者ノ如此語チ發スル  
 モ、亦難者自ラ己レノ理想ニ一應比較調査シタルカ爲メ  
 ナリ、乃チ己レ自ラモ哲學ノ一部チ用ヒテ始メテ如此云  
 フチ得タルナリ何者各人ガ事ノ是非ヲ決斷スルハ既ニ已  
 ニ哲學ノ功カニ依頼シタル者ナレバナリ、然レバ難者ノ  
 云フヘキ所ハ、左ノ如クナルベシ、則チ我ニ反對スル所ノ  
 說チ主張スル哲學者ハ、我ヨリ見レバ非ナリ、曲ナリ、邪ナ  
 リ、僻ナリト、口チ極メテ說破罵詈スルチ得ベキナリ、然レ  
 ヒ進ミテ難者ハ凡テ世上ノ哲學ナル者ハ無用ナリ非曲ナ  
 リ或ハ有害ナリトハ口ニタモ云フチ得ザルナリ何者若シ  
 云フチ得レバ難者自ラ其ノ云フ所無用ナリ非曲ナリ或ハ  
 有害ナリト自証スルカ故ニ寧ロ之ヲ言語ニ出ササルニ如  
 カズ否口外スルチ得ザルナリ

然レヒ難者ノ如此誤リテ哲學ヲ非謗スルモ、亦少シク由  
 縁スル所ナキニ非ズ、其ノ何ナルヤチ問ヘバ、曰ク、古來哲  
 學者ガ哲學チ妄用シタルト、人チ以テ理チ論ズルハ通常  
 人ノ止チ得ザルト、又善惡是非曲直チ判斷スル所ノ道德  
 ノ標準、則チ倫理ノ大本ノ一定セザルカ爲ナリ、  
 實ニ此ノ大本ダニ一定スルチ得タランニハ、世上亦無事  
 靜寧、論モナク、疑モナク、迷モナク、爭亂モナク、戰鬥モナ  
 シシテ、彼ノ完全ノ眞理界ニ達スルチ得ベキナリ、然ラバ  
 此ノ佳境ニ入ラン爲ニハ、抑、何ニ依ランカ、曰ク、哲學ノ外  
 亦方便アルコトナキナリ以上云フ所ヨリシテ見レバ如何ニ  
 淺露短才ナル輩ト雖ヒ、亦哲學チ非難シ、倫理ノ大本チ一  
 定スルノ不用ナルコトハ云ハザルベシ、否之チ云ハシメタ  
 ル所ノ根原ナル哲學ノ妄用チ止メ、人々ノ爲ス所眞理ニ  
 合適シ、道德ノ標準倫理ノ大本一定セバ、之チ云フチ得ル  
 ノ途全ク斷絶スルナリ、  
 哲學チ妄用シ、且爲ス所眞理ニ合ハザルハ必ス倫理ノ大  
 本一定セザルカ爲ナリ、若シ一定セバ既ニ云ヒタル如ク  
 迷フコトナシ迷フコトナクンバ妄用或ハ眞理チ脱スル如キコ



ハ萬アルヲ得ント欲スルモ能ハザルヤ明白ナリ、  
故ニ今ヨリ進ミテ試ニ彼ノ大本ヲ定メテ、世上ノ罵々々  
ル雜論、迷妄、爭亂、力戰ヲ除去ルノ途ヲ開キ、上ハ國政ヨリ  
下ハ一個人ノ品行ヲシテ一定ノ方向標準ヲ得セシメ、善  
惡、是非、正邪ノ因テ判然スル所ヲ發見セントス、然シ他日  
余カ云フ所ヲ批評シ給フノ諸君子ハ宜シク以下陳述スル  
所ハ唯、學術上ノ談ニ止リ、且ツ未ダ余ハ未熟淺識ニシテ  
決シテ眞ノ哲學者ニハ非ラズ、文辭卑屈、意ノ如クナラザ  
ル等ノヲチ忘却シ給ハズ、罵詈廣言チノミ主トセラレズ、  
沈思熟考、大人ノ所爲ニ出デ給ハンコト希望ニ堪ザルナリ  
(而シテ余ハ未ダ全ク左ノ説ヲ固信スル者ナラズ、則チ之  
レカ爲ニ生命ヲ惜マザルノ心醉家ニ非ラズ、唯、今日マデ  
余カ見聞ニ觸レタル説ノ中ニテハ、最モ誤謬少ナキカ爲  
ノ故ニ茲ニ論究セシ迄ナリ、諸君子其レ之ヲ諒シ給ヒテ、  
(以下次號)

雜 報

○東京化學會記事 明治十六年一月廿日午後第二時ヨリ  
例場ニ開會ス

植田豊橘君故理學士橘楠三郎氏卒業論文本邦製鹽ノ説ヲ  
讀ム

次ニ石藤豊太君ハ昨年同氏カ本邦諸處ノ鹽田ヲ實視サレ  
シ時目撃サレシ事實ト右橘氏論文中ニアルモノト或ハ異  
ナル處アルヲ述ヘ又赤穂鹽田ニ於テ農商務省御雇 コー  
セルトルノ實驗サレシ新鹽田ニ付演述シ今日本邦ノ鹽製  
法ヲ改良スルハ實ニ難事ナルヲ述ヘラレタリ

次ニ中澤岩太君本會ニ准員ヲ置クコトヲ動議ス集議ノ上之  
ヲ置クコトニ決ス而シテ本會員ト准員トノ區分ニ付種々議論  
アリタリト雖モ到底之ヲ決スル能ハサルヲ以テ其決議ハ  
次會ニ延シ閉會ス

閉會ノ後チ別室ニ於テ茶菓ヲ供ス  
○工學用語ノ一定 東京大學工學科ニ關係アル諸君ニハ  
吾國工學ニ用サレ語チ一定セントノ目的ニテ數年前工學  
辭書編纂ニ着手サレシガ最早其大半ハ成就シ本年中ニハ  
該書出版ニ到ル可キ手續ナリトツ吾國工學ノ爲ニ喜フヘ  
キコナリ

○肥料及昆布ノ分析 近來北海道小樽邊ニ於テ大口魚ヨ



リ肝油ヲ製スルノ量夥多ナレハ其絞粕ヲ肥料ニ供セント  
或化學士カ分析ヲ遂ラレ左ノ主成分ヲ檢定セラレタリ

磷酸

一〇〇、分中ニ  
一、六二三分

窒素

二、一七七分

灰分

三、八五四分

水分

八、二一八分

又昆布中若干ノ沃素ヲ含有スルヤヲ檢セラレシニ昆布ノ  
灰百分中ニ沃素ノ量ハ、二七分ナレハ適宜ノ方法ヲ以テ  
製取セハ必ス潤益アル可シ云々

○印刷板石 武州五日市近在ノ第三期岩石中ニ印刷板石

ノ存在セルコトハ已ニ地質調査員其地ニ巡廻ノ節發見セラ

レタルカ頃日其石質ヲ精査セラレシニ至テ美質ニシテ必

ス印刷用ニ適スルナラント

○無名會 嘗テ本紙ニ記載シタル東京大學ノ有志者集テ

毎月一回ツ、諸藝人ヲ招キ落語講談音曲等ヲ聽聞セラル

ル無名會ハ設立以來未タ一週年ニ滿サルモ會員已ニ九十

余名ニ及ヒタレハ百名ヲ限リ加入ヲ謝絶セラレヤニ洩レ

聞

○歐洲地質圖 各國ノ地質家集リテ歐洲一般ノ地質圖ヲ  
製成セシコトハ已ニ決議シタレハ百五十萬分ノ尺度ヲ用井

テ其縮圖ヲ柏林府ニ於テ出版スル由

○黑鉄發見 <sup>ブラツクバンド</sup> 製鐵ニハ最モ緊要ナル鑛物ノ一ナル黑鐵鑛

(Blackband) ハ其以前本邦ニ產所アルヲ知ラサリシカ昨

夏岩佐氏巖鑛山巡視ノ途路越中新川郡西種村ニ於テ發見

セラレタル委シクハ論說ノ部ヲ見ヨ

○高島家譜 細川潤次郎氏ハ高島秋帆先生ノ家譜及ヒ建

言書ノ遺稿ヲ編纂シ有志者ニ配布セラレタリ

○蛇木ニ化ス Searhor Lopes Netto 氏ハブラジル國ノマ

ットオ、グロツツチノ地ニ於テ木幹中ニ *Catarrhus* (蛇ノ一

種) ノ全ク木質ニ化シタルヲ看出シ佛蘭西ノ植物學會ニ

送り檢査ヲ乞レシニ疑モナク動物質ノ植物質ニ化シタル

モノナリト是レ植化動物ノ最始ノ發見ト云フ可シ

○雪花石膏 甲斐巨摩郡三里村<sup>ミサト</sup>内荒倉組ニ產出スル雪花

石膏ハ純良ニシテ彫刻材ニハ屈竟ノ品位ナレト道路嶮岨

ニシテ運輸ノ不便ナルト產量ノ少ナキトハ遺憾ノ至リト

或地質家ノ語ラレキ